

行政院國家科學委員會專題研究計畫 成果報告

對於主要比喻表現的多義性及意義構造之認知意義論比較
研究

計畫類別：個別型計畫

計畫編號：NSC93-2411-H-002-088-

執行期間：93年08月01日至94年07月31日

執行單位：國立臺灣大學日本語文學系

計畫主持人：謝豐地正枝

報告類型：精簡報告

處理方式：本計畫可公開查詢

中 華 民 國 94 年 12 月 19 日

国家科学委員会に対する報告論文

民国九十三年度專題研究計畫獎勵受賞

主な比喩表現の多義性及び比喩の意味構造に対する
認知意味論的比較研究

謝豊地 正枝

国立台湾大学・日本語日本文学系教授

1. 0 論文の目的及び研究の手順

本論文のテーマは「主な比喩表現の支える多義性及び比喩の意味構造に対する認知意味論的比較研究」である。また、論文の目的は、1980年代に始まった認知言語学の諸理論によって、それぞれの比喩表現の意味構造を解析して、それらの比喩表現が表示する多義性と意味的な転用・転換・派生の過程及び意味概念の種類を明らかにすることを目的としている。日本語における比喩表現に対して、従来の統語論的な観点からその文法的な価値を検討するというよりは、新しい認知言語学及び認知心理学の諸理論に基づいた研究分析・解析方法を用いて、以下の三点について明らかにすることにある。

第一に、日本語における提喩（シネクドキ）、直喩（シミリ）、隠喩（メタファー）、換喩（メトニミー）、共感覚比喩、などの比喩表現を研究対象に選び、それぞれの比喩による表現の形成過程及び意味構造における差異を比較分析して研究する。共感覚比喩表現に関しては、味覚形容詞である「甘い」「辛い」などを中心に、それぞれの語によって表示される多義性及び意味的転用・転換・派生のプロセスを解明して比較研究する。

第二に、それらの比喩の形成過程及び意味構造形成過程において、古典的な意味論に基づいた比較理論や緊張理論や相互作用理論、などに加えて、新しい認知意味論的な諸説とが、それぞれどのように係わっているかという係りあい方の相違点、及び、それらの諸理論・諸説間に存在する差異と問題点について分析して明らかにする。

第三に、考察を更に一歩進めて、「比喩の良否」に関して、聞き手の直感に任せて個人的な好みによって判断して貰うのではなく、科学的に測定するために、主な測定法及び「パス解析」方法に基づいた分析方法を用いて、「比喩の良否」に対する査定を試みる。結果として、比喩表現のよさを測定する方法として、「パス解析」法が妥当であるか、どうかについて、前述のそれぞれの主な比喩表現に属する「表現」を含む構文を選んで実際に「パス解析」法を用いて実験・考察した上で、結論として私見を述べる。

先行研究としては、国内外における比喩に関する研究に関しては、英語教育においては主に「隠喩」の研究が主流をなしている。日本語教育においては、直喩及び隠喩の研究はかなりなされているが、提喩、換喩、共感覚比喩に関する研究は少ない。特に、共感覚比喩に対する研究は、英語に日本語両教育界共に、まだ開始されたばかりの未知の研究分野であり、現段階では、英語の論文が一編、日本語の論文が申請者のものを含めて三篇発表されているのみであ

る。したがって、この研究は意義がある。

2. 0 メトニミー及びシネクドキによる比喩表現に対する認知意味論的分析と考察

2. 1 メトニミー及びシネクドキに係わる諸理論に対する考察

まず、カテゴリー的意味の包摂関係によるシネクドキの形成について考察する。比喩表現の主なものには、シミリ（直喩）、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）などがある。それらの表現の差異を文例によって【表 1】に示す。

【表 1】 主な比喩表現法による文表現の差異

<u>比喩表現法</u>	<u>文表現</u>
直喩	(1) 彼女は牡丹の花のようだ。
メタファー	(2) 彼女は牡丹の花だ。
メトニミー	(3) 牡丹の花模様のだらりの帯が歩いて来る。
シネクドキ	(4) 中国画の花の図案は牡丹の花（の図案）がいい。

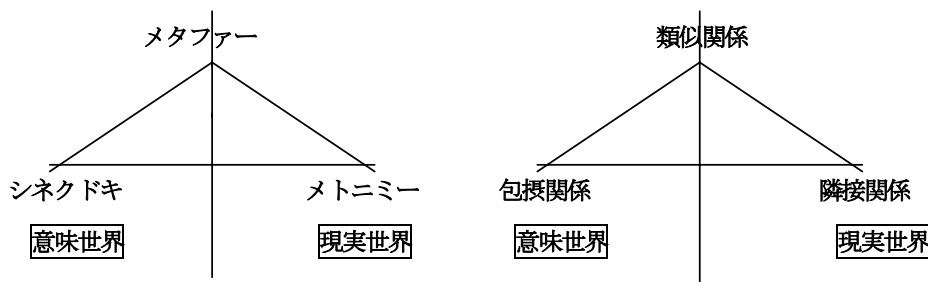
において、(4) 文はシネクドキ表現で、「中国画による花の図案の中では、牡丹の花（の図案）が最も美しい」という意味を表現している。「中国画の花の図案」が「全体」を表現して、「牡丹の花（の図案）」がその「一部分」を表現している意味関係にあるからである。この場合、「中国画の花の図案」と「牡丹の花（の図案）」とが形成する意味関係は「包摂関係」に基づいている。これに対して、(3) 文における「(牡丹の花模様のある) だらりの帯」とはメトニミー表現で、それを所有して着ている舞妓を指して、「(着物を着てだらりの帯を締めた) 舞妓」が「全体」の意味を成しており、「(牡丹の花模様のある) だらりの帯」はその舞妓全体の「一部分」である。したがって、「部分」によって「全体」を指すメトニミーを形成している。この場合の「部分—全体」が形成する意味的な関係は「包含関係」である。

シネクドキに対するヤコーブソン説の見解には、柔軟性が見出せる。例えば、比喩を形成する二項が「全体—部分」の意味関係を示す際に、ある状況下においては、それら二項の関係が「メトニミーとシネクドキの境界線上にある」と指摘する。そして、ある文脈において用いられた比喩的表現がメトニミーであるか、シネクドキであるかに関しては、言語主体の指示対象に対する「視点の差異」に関係しており、それぞれの状況によって異なる解釈法が存在すると

みなす。そして、ある比喩表現がメトニミーかシネクドキかのどちらであるかを判断するのに決定的な根拠として、ある言語主体によって「象徴的」に用いられた二項間の意味関係によって表示される時間的配列が、「転位的な概念を示すメトニミーな隣接性」に基づいているのか、或いは、「圧縮的な概念を示すシネクドキ的な隣接性」に基づいているのか、若しくは、単に「同一化」・「象徴化」に基づいているのかに係わっていると指摘する。¹

また、レイコフ説ではシネクドキは「死喩」であり、メトニミーの一種であるとみなす。² クーパー説では、シネクドキはメタファーとして生き残りながら死喩になっていくものもあり、慣用句へと変化して生き延びるものも存在すると主張する。³ 日本においては、シネクドキはメトニミーの一種であるとの見方が強く、中村明説ではシネクドキをメトニミーから離すのは容易ではないとの見解を示す。⁴ メタファー、メトニミー、シネクドキの三種類の比喩表現を「認識の三角形」図を用いて示し、更にそれぞれの比喩表現に対応する意味関係を「意味関係の三角形」として比較表示したのは、瀬戸説である。⁵

【図 1】 「認識の三角形」図及びそれに対応する「意味関係の三角形」図



一方、楠見説はそれらの比喩表現に対応する意味関係を、比喩の処理過程に関する実験結果に基づいて、【表 2】のように分類する。楠見説は直喩・隠喩処理には、スクリプト的意味が加わることがあることを発見し、「その場合には、メトニミー処理過程と共通性をもつことになる」点を指摘した。⁶ この解析に基づいて楠見説は、瀬戸説の「認識の三角形」による提案に対して以下の三点の修正案を提示している。その三点とは、(1) “現実世界”、“意味世界”

註解

¹ R.ヤコーブソン『一般言語学』1973年、川本茂雄ら訳、みすず書房、p.210、p.221-p.222。
² G.レイコフ・M.ジョンソン『レトリックと人生』1999年(増補版)、池上嘉彦ら訳、紀伊国屋書店、p.91-p.108。
³ David Cooper *Metaphor: Aristotelian Society Vol.5*, 1986, Basil Blackwell, Oxford, Great Britain, p.118-p.127。
⁴ 中村明『比喩表現の理論と分類』1952年、国立国語研究所、p.33。
⁵ 瀬戸賢一『認識のレトリック』海鳴社、1997年、p.194-p.201。
⁶ 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』1995年、風間書房、p.170-p.206。

に“情緒・感覚世界”を加えること、(2)それぞれの“世界”を表象した知識内の意味構造として、「現実世界」に「スクリプトの意味」を、「意味世界」に「カテゴリー的意味」を、「情緒・感覚世界」に「情緒・感覚的意味」を対応させること、(3)直喩・隠喩処理は三つの意味世界と意味関係、すなわち、【多重意味構造】に依拠することを想定すること、の三点である。

【表 2】 楠見説によるシネクドキの分類法に対する理論的根拠表

比喩表現	比喩表現の基礎となる意味関係
シネクドキ	カテゴリー的意味の包含関係に依拠
メトニミー	スクリプト的意味の隣接関係に依拠
共感覚的比喩	情緒・感覚的意味の類似関係に依拠
直喩・隠喩	上記の三つの意味による三つの関係に依拠

関連して、楠見説はシネクドキが“意味世界”における推論に依拠している点を強調する。そして、シネクドキには、「特殊化方向の推論（カテゴリー名で典型性の高い事例を示す：花→桜）と、それとは逆に、一般化方向の推論（典型事例でカテゴリーを表す：パン→食物）が働いている」という、二つの推論が関わっているとの見方を示す。そして、「花」と「桜」とがシネクドキ関係にある時は「一義性」であるとの条件を付加している。この点について、「直喩・隠喩における【主題—喩える語】間の一義性は、喚喩・提喩に比べると低い」と見なす。⁷ 従って、シネクドキは意味世界および情緒・感覚世界の二領域に深く関わり合っていること、一義性が高いことなどをシネクドキの特性として指摘しているのである。

註解

2. 2 比喩のシネクドキ基本説および「シネクドキ二種類説」に対する考察

グループμは、楠見説によるシネクドキ論には反対の立場に立って、シネクドキにはⅡ型のものと、Ⅲ型のもの、の二種類があると主張する。本稿では、以下、グループμによるこの説を「シネクドキ二種類説」と仮称して論旨を進める。

(5) 林さんは髪が長い。

において、Ⅱ型のものでは、メロニミー関係を示す「林さん＝頭と胴体と腕と脚と顔と髪と…」を分解する。命題である「Xは人間である」と「Xは頭を有する」と「Xは胴体を有する」と

⁷ 楠見孝『前掲書』、p.186。

「Xは腕を有する」…「林さんは髪を有する」等の諸命題の積との間に等価性がある。このような分解法を『配分的 (distributive)』とみなす原因は、全体の意味素が部分部分に不均等に配分されているからである。分解法は配分的であり、知覚的に分解されている。⁸ 以上のグループ μ による「シネクドキ二種類説」の理論的な根拠に基づけば、上記の(5)文例、並びに、下記の文例、

註解

(6) あのバスは窓が大きい。

における「X」と「Y」とが形成する意味的な関係は、いずれの関係も Π 型のものである。

これに対して、木の概念を上位レベル（認知言語学的に言えば『基本レベル』）に位置するものとみなして、下位レベルで互換性のある下位概念が位置しているとみなす分解法がある。それぞれの木は個体であり、下位レベルのいずれかの種類の木に属している。木という「類」の下では、それぞれの桜、松、杉などは排他的な型の分離、若しくは「和」を形成していることが見いだされる。「xは木である」＝「xは桜である」あるいは「xは松である」あるいは「xは杉である」あるいは…という分解法を示す。この場合は、分解法は『属詞的 (attributive)』であり、概念・論理的に分解されている。そして、木全体はそれぞれ排他的な型の部分同士の論理的「和」で構成されている総体なので、 Σ 様式型のもと分類される。この分解法による Σ 様式の『全体一部分』の意味関係は、類と種の関係であると同時に、概念の外延の意味としての『全体一部分』を含む包含関係を示すシネクドキの意味構造である。これはメトニミーに還元できない。以上の理論的な背景に基づくと、

(7) 花は桜がいい。

における「X（「花」）」と「Y（「桜」）」とが形成する意味関係は、シネクドキ Σ 型であると判断できよう。「語」に対する「シネクドキ二種類説」による分解法に依拠すると、 Π 型に基づけば、「外心的指示系列」に沿って「林さん→髪」を作ることができる。これに対して、 Σ 型に基づけば「内心的意味系列」に沿って「花→桜」「桜→花」を作ることができる。この意味は、グループ μ による理論に依拠した場合、(5)文の「林さんは髪が長い」に対する分解方法と、(7)の文の「花は桜がいい」に対する分解方法の相違は明白である。しかし、それぞれの文に対する分解方法が異なる理論的な根拠については、グループ μ 説では明確に解説されていない。

註解

この分解方法の相違が発生した理論的な根拠について考察すると、(5)「林さんは髪が長い」文と(7)「花は桜がいい」文との統語論に基づいた文法的な文構造にあるのではない。なぜ

⁸ グループII『一般修辞学』1996年、大修館書店、p.195。

ならば、これら二文例の示すそれぞれの統語論的なレベルでの文構造を形成する品詞配列は「X+Y+形容詞」であり、全く同一であるからである。分解方法の差異が生じた根拠は、それぞれの文例に対応する意味構造の相違にあるものとする外、他に適格な根拠となる文法的な要素が存在しないケースであろう。就中、これらの二構文を支えるそれぞれの意味構造は、それぞれの文における主題の派生プロセスの相違にも直接的に関連しているものと考えられるのである。

第一に、シネクドキ二種類説の主張するⅡ型（解剖型）による分類方式、及び、Ⅲ型（概念型）による分類方式の差異に関して比較すると、【表 3】のように示すことができる。

【表 3】 シネクドキ（提喩）を構成する「解剖型」と「概念型」の分類法

Ⅱ型（解剖型）の分類方式

- i. 車：[車体、ヘッド・ライト、ハンドル、ブレーキ、シート、．．．]
- ii. 木：[幹、根、枝、葉、．．．]

Ⅲ型（概念型）の分類方式

- i. 哺乳動物：[鯨、馬、犬、猫、．．．]
 - ii. 木：[松、杉、檜、桜、．．．]
-

次に、解剖型と概念型は二つの指示対象となる語彙間の意味関係が、「全体一部分」か「部分—全体」か、いずれかのタイプを表すかによって、更に二つの類型に下位分類できる。それをまとめて下に示す。この表に基づくと、【花—桜】の意味関係は、概念的Ⅲ型の「特殊化」という類型であることが分かる。

【表 4】 シネクドキ（提喩）の類型

- [1] 解剖的Ⅱ型[一般化]：[例：校門→学校]
 - [2] 解剖的Ⅱ型[特殊化]：[例：乱れ髪→女性]
 - [3] 概念的Ⅲ型[一般化]：[例：鉄砲→凶器]
 - [4] 概念的Ⅲ型[特殊化]：[例：花→桜]
-

関連して、包摂関係に基づく Σ 型のタイプについて考察すると、同一の「語」を、状況によって、 Π 型に基づいても Σ 型に基づいても分解することが可能である。この外に、 Σ 型のタイプは分解操作をする際には、論理的「積」の方式をとることも「和」の方式をとることもできる。しかし、包含関係を示す「 Π 型」のタイプはそのように二通りの分解操作ができない。単に論理的「積」の方式をとることができるのみである点が見出される。加えて、シネクドキとメトニミーとの相違は、実際に比喻を運用する場合にシネクドキはメタファー的な表現とを兼ね合わせることが出来る点にも見出すことが出来る。例えば、

(8) 黄金は鉄の下に崩れ落ちる。

というサン・タマン (Saint-Amant) の表現は、「鉄製の武器ではなく農具こそが黄金の価値がある」という意味をシネクドキとして表現したものである。この表現には、「提喩(シネクドキ)の中に淡い隠喩(メタファー)的色あい」が見られる。⁹ このように二つの比喻が重ね合って一つの比喻表現を具現化できることは、メトニミー表現にはあまり見出されず、シネクドキの特性が表面化したものと考えられる。

しかし、グループ μ による「シネクドキ二種類説」は、どのような理由によって「 Π 型」のタイプが、「 Σ 型」が示すような二通りの分解操作ができないという、操作レベルにおける相違の発生に関する理論的な根拠を明らかにしてはいない。それ故、この相違がどんな根拠に基づいて発生するかという原因について考えると、包摂関係を示すタキシノミーにおける上位レベルに位置する上位カテゴリーの概念と下位カテゴリーの概念との意味的な結びつき方と、包含関係を示すパートノミーにおける上位・下位に位置する概念との結びつき方の相違に依拠しているものと考えられる。すなわち、上位に位置する概念と下位に位置する概念は、包摂関係を示す上・下階層を飛び越えて結びつくことができる。その意味は、どのレベルの上位カテゴリーの概念でも、どのレベルに位置する下位カテゴリーの概念を包摂することができる上に、「逆も真なり」の関係を示す。その条件下にある二つの概念の間に起こる「結合」は、位置する包摂を示すレベルが異なってもさえないれば、結びつき方に関してはなんらの制限を受けない。これは比喻表現を形成する抽象的な意味概念同士の「包摂的な結合」であることに基づいているからである。

これに対して包含関係である「パートノミー」の関係にある二つの概念は、一方が直ぐ上位レベルに位置しているか、或いは、直ぐしたの下位レベルに位置していなければ、結合することができない場合も生ずる。下記の二文例はその結合法の相違を示す。

⁹ グループ μ 『前掲書』、p.244。

(9) 松は植物の一つである。

(10) * 爪は腕の部分である。

において、(9) 文中の「松」と「植物」という二概念が示すシネクドキ的結びつき方と、(10) 文中の「爪」と「腕」という二概念が示すメトニミー的な結びつき方とは、必ずしも一致しない場合もある点を示す。二文中のそれぞれの二概念による結びつき方に見出される決定的な差異は、シネクドキを形成する二項による結びつき方は意味世界におけるカテゴリ的な結びつき方である点である。他方、メトニミーを形成する二項による結びつき方は、意味世界におけるカテゴリ的な結びつき方ではなく、実際の具体的な固物体を表す意味概念による結びつき方だという点にあるものと考えられるのである。しかし、グループ μ による理論によれば、上記のパートノミーに基づいた包含的な意味関係と意味構造に支えられたメトニミー的な比喻表現も、シネクドキの一種と見なす立場をとるのである。

2. 4 シネクドキのメトニミーからの分離・独立説に対する考察

佐藤信夫説は、本質的には、シネクドキとメタファー（隠喩）とは語句の意味的な類似性に基づく比喩であるという点において共通であるとの観点に立つ。佐藤説の立場に立つならば、メトニミーとは現実的な共存性に基づく比喩であるから、シネクドキとは根本的には対立せざるを得ない。加えて、佐藤説は、「シネクドキ二種類説」は正しくないとみなす。そして、「シネクドキ二種類説」の根本的な間違いの原因は、II型様式の分解法が意味的な側面を指すのではないにもかかわらず、グループ μ が「現実の木の分解」と「木の意味の分解」とを混同している点にあると指摘する。グループ μ によるII型様式は現実に存在する物体の構造の分解であって、意味的な側面の分解ではないと佐藤説はみなす。そして、II型様式における「全体一部分」は現実的な物理的な測定では「大=小」、「含有=被含有」の関係を示すが、それぞれの個々の部分は概念、若しくは、意味の上では対等である筈だと主張する。¹⁰

註解

グループ μ はII型様式を形成している個々の部分と全体との関係は、「不均等」的に分割されていると見る。しかし、佐藤説は、II型の分割法とは、意味的な面をふくまない実際の固物体の分解であるにもかかわらず、グループ μ が意味的な側面を含むものと誤解しているのだと指摘する。更に、意味の上では、II型様式における「全体一部分」とは「隣接して共存している」という点で「均等」の関係にあるものを、グループ μ が「それぞれの『部分』は不均等」の関係によって『全体』に結ばれている」との見解を示しているのは間違っていると正している。

¹⁰ 佐藤信夫『レトリック感覚』1978年、講談社学術文庫、p.183—p.192。

「固体に対する実際的な分割法」をもとにしてそれをグループ μ は意味的な領域にまで無理に拡張させていると指摘する。果たして佐藤説の批判は全て正しいのであろうか。

グループ μ の観点について、認知意味論的なプロトタイプ論に基づいて考察するならば、全体の概念を構成するそれぞれの成員の中には、プロトタイプも周辺の意味特徴を示す成員も含まれているのであるから、その状態は「部分部分の意味素が不均等に配分されている」状態に相当するとも見られないことはない。加えて、同じ言語主体によって一つの「語」が発話されても、その「語」の指示対象となる概念が変化すれば、その概念上の変化に伴って別の語義を示すという多義構造を示す「異なる比喻表現への転換とそれを支える意味構造上の変化」が見出だされる。多義的別義が複数に上ると仮定して、それぞれの個々の多義的概念が意味的な連続体をなしている場合には、佐藤説の立脚している古典的な意味論の観点によって言語現象の全てを説明することが可能であろうか。現段階では、グループ μ はプロトタイプ論に対する独自の見解を明確にしていない故、グループ μ 説と佐藤説の対立に関する理論的な相違に対する判定は今後の課題とも言うべき問題であろう。

語の概念について考えれば、その概念には外延と内包という二つの側面がある。外延とは Σ 様式の全体としての《桜》の概念が存在することであり、それに対して「桜」の内包は、ある存在物を桜として認めるための「基準となるような性質、資格条件を集めたもの」であり、その集積が、 π 様式による全体としての《桜》という概念である。 Σ 的全体（外延）と π 的全体（内包）は表裏一体の関係にあり、一方が決まってくれば、他方もそれにつれて決まってくる。以上の立場に基づいて、佐藤説は下記の修正説を提案している。¹¹

註解

「シネクドキ二種類説」に対する佐藤説による修正案のまとめ

- | | | |
|------------|---------|--|
| II型 | 外心的指示系列 | それぞれの部分の理論的「積（プロデュイ）」によって構成されている総体 |
| Σ 型 | 内心的意味系列 | それぞれの部分同士の理論的「和（ソム）」で構成されている総体＝外延的意味関係 |
| π 型 | 内心的意味系列 | それぞれの意味素によって理論的「和（ソム）」で構成されている総体＝全体という概念に含まれるべき属性の総体＝内延的意味関係 |

¹¹ 佐藤信夫『前掲書』、p.179—p.188。

上記の佐藤説は、グループ μ の主張するシネクドキの Π 型はシネクドキの一種ではなくて、メトニミーに分類されるべきだと結論づけている。そして、現実的な隣接性である Π 型の「全体一部分」に関する比喻は全てメトニミーであり、 Σ 型およびそれと表裏一体である π 型の「全体一部分」は、現実的な隣接性を伴わず「類と種」の関係であるからシネクドキであると指摘している。佐藤説に従えば、「林さんは髪が長い」構文はメトニミーとして分類されるべきで、「桜は花がいい」構文はシネクドキとして分類されるわけになり、本稿もこの観点に同意する。

関連して、シネクドキとメトニミー間の分類上の問題は、根本的には、「隣接性」についてどのように定義し、解釈するかにある。しかし、隣接性がすべてのメトニミーを説明できるかどうかに対する懐疑論もないわけではない。従来の「隣接性」に対する定義に批判的な立場にある芝原説は、【メトニミー関係の仮説】として、「メトニミー関係は、すべて、連結関係である。」という仮説を提案している。それによると、芝原説が基本的には「隣接性とは、連結関係だ」と見なしている点が見出される。¹²

註解

「芝原説による論証」のまとめ

- a. x と y はともに z と鋭く対立するという点で似ている。
- b. x と y はともに z としては扱えないという点で似ている。
- c. x と y はともに z と違うという点で似ている。

芝原説は上記の論証によって、隣接性以外のメトニミー関係が隣接性に直接似たものになることを示した。芝原説に基づく、隣接性以外のメトニミー関係が隣接性に似てくるのが明らかになる。但し、芝原説はシネクドキの隣接性には触れてはいない点を指摘しておきたい。例えば、「隣接性とは、連結関係だ」とみなしている芝原説の観点に基づけば、シネクドキは「連結関係」に基づいて成立している意味関係であるということになる。それ故に、芝原説の仮説に基づいて、シネクドキの意味構造を支える、「意味世界における意味的なカテゴリレベルにおける結合による隣接性」、及び、「メトニミーの意味構造を支える現実の外界に存在する物体を仲立ちとした結合による隣接性」との間に見出だされる【結合の質的な相違】に関して説明するのは難しいと思われる。

2. 5 メトニミー表現を支える「隣接制」に対する分析と考察

¹² 芝原宏治『錯誤の意味論』1995年、海鳴社、p.110—p.115。

メトニミーとは比喩の一種であり、ある一つのことをそれに関係した他のものによって表す修辭法である。そして、「主意」と「媒体」という二つの比喩成分は、「隣接性」或いは「近接性」もしくは「共存性」などの意味関係や、「時間的な関係」「因果関係」などの諸関係に基づいてメトニミー表現をする。初山論文によれば、メトニミーとは、二つの事物の外界における隣接性、或いは、二つに事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて他方の事物・概念を表す比喩であると定義される。¹³

メトニミーを記号 (sign) の類型の視点から考察すれば、「図標 (icon)」であり、類縁性のないものが「シンボル (symbol)」であり、「指標 (index)」はそれらの中間に位置する。これに基づく、一般的な単語である「花」はシンボルの一種とみなすことができる。日常生活においては、「指標」はヒントになる。例えば、「煙」を「指標」として、「火」を、「忙しく散る花びら」を「指標」として「桜」を推論することができるからである。

関連して、「XはYが+述語形容詞」構文を用いたメトニミーを左側に示して、それぞれの構文中

におけるある文成分が「全体」の意味を、そして、別のある文成分が「部分」の意味関係を表示しているのを、右側に併記する。

- | | |
|---------------------|-------------|
| (11) 山村は屋根が眠っている。 | 【容器 — 中身】 |
| (12) だらりの帯は笑窪がかわいい。 | 【主 — 従の共存性】 |
| (13) 石川達三は内容が難しい。 | 【作者 — 製品】 |
| (14) 厚化粧は歌声が高い。 | 【主 — 従の共存性】 |
| (15) 白旗陣営は残兵が少ない。 | 【原因 — 結果】 |

において、(11) の文の場合は、「山村」が「村人達」を喩えており、「山村」という場所を容器と見立てている。そして、その山村で眠っている「村人達」を「中身」と見立てており、抽象度が高い。(12) 文中の「だらりの帯」は主体の舞妓に付着していて、聞き手に「主体」を推論させるもの、若しくは、「だらりの帯」を主体に物理的に隣接している個体と見ることも可能であろう。(13) 文のもともとの文は、「石川達三が書いた本の内容が難しい」であるので、「内容」が「本」を喩えており、主題である「石川達三」が「作者」を表示しており、それを「容器」として見立てる。そして、「内容」が「本の内容」を喩えている。そして、「容器」である「作者」に対して、「製品」である「中身」と見立てて表現している。

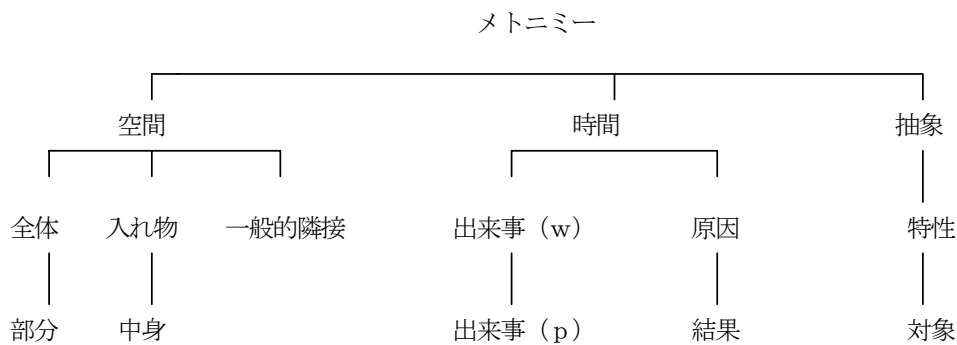
¹³ 初山洋介「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学 80』、1997年、名古屋大学国語国文学会、p. 31。

また、(14) 文中の厚化粧は、「厚化粧をした女性歌手」を喩えており、主体である「厚化粧をした女」を「容器」として見立てた場合、「歌声」は「主体に従属しているもの」であると見立てることが可能である。また、(15) 文中の白旗陣営と「残兵」とが、「全体—部分」の関係を示す。

上部のメトニミー表現においては、喩えるもの（主意）と喩えられるもの（媒体）の二つの事物が、【全体—部分】を示す包含関係に基づいており、「隣接性」が見出される。このように、メトニミーは、主に、主意と媒体とが物理的に結合するという結び方を示す。但し、初山論文が提起しているように、二つの概念の思考内や概念上の関連性にもメトニミー表現が乱されることもあるので注意を要する。これに対して、シネクドキは、タキシノミーにおいて上位レベルに位置する概念と、下位レベルに位置する概念とのカテゴリのレベルにおいて結合による【隣接性】を示す。従って、シネクドキの示す【隣接性】とメトニミーが示す【隣接性】とは、「結合の仕方」質的に全く異なるという知見を得る。

メトニミーの意味関係における主意と媒体との意味的な関係について考察すれば、さまざまな組み合わせが存在していることが観察できよう。それらの主なものには、例えば、【容器—中身】【材料—製品】【主体—手段】【主体—付属物】【作者—製品】【原因—結果】などがある。これらのメトニミーによって示される主意と媒体の間に存在する意味関係における上下に加えて、抽象性のより高いレベルと低いレベルを設定してそれらの意味的な相関関係を【図 2】に図示する。¹⁴

【図 2】 メトニミーの種類の相関図



¹⁴ 瀬戸賢一「意味のレトリック」、巻下・瀬戸編「文化と発想とレトリック」、1997年、研究社、p. 123。

2. 6 シネクドキとメトニミーの比喻表現を支える意味構造に対する分析と考察

前項において、【全体一部分】の関係に対するシネクドキおよびメトニミーとの定義上の相違に対して分析・考察した結果を踏まえて、下記の文例における「X」と「Y」とが形成する意味的な関係を明らかにする。

- (16) 花は桜がいい。 【再掲】
- (17) 林さんは髪が短い。 【再掲】
- (18) あの茶髪は背が高い。
- (19) あの茶髪は感じが自然だ。

におけるそれぞれの文例中の「X」と「Y」とが形成する意味関係について、本稿の立場は次の通りである。

【1】 (16) 文例における「花」と「桜」とは外延的意味関係を示している「Σ型」であり、「桜」を含むそれぞれの部分同士の論理的「和(ソム)」によって「花」という概念を構成している。そして、「類」と「種」という意味的な包摂関係に基づいたシネクドキであると分類する。

【2】 (17) 文例における「林さん」と「髪」とは、外心的指示系列として、「髪」を含むそれぞれの部分の論理的「積(プロデュイ)」によって「林さん」が構成されている。この意味的な関係はグループμの指摘する「Π型」のシネクドキに相当するが、本稿では「林さん」と「髪」との関係がイメージおよび連想という意味世界に属していない概念同士の形成する意味関係であることに基ついて、現段階では「全体」と「部分」という意味的な包含関係に基づいたメトニミーであると解釈せざるを得ない。

【3】 (18) 文例における「あの茶髪」と「背が高い(人)」とは、内包的意味関係を示す。内心的意味系列としては、「茶髪」を含むそれぞれの意味素の論理的「和(ソム)」によって「背が高い(人)」が総体として構成されている。「あの茶髪」と「背が高い(人)」とが形成する意味的な関係は、佐藤信夫説による「π型」であり、発話状況および話し手の視点によって、シネクドキともメトニミーとも判断できる両比喻表現の間の境界線上に位置するものと解釈する。

【4】 (19) 文例における「茶髪」と「感じ」との意味関係は、髪の色に焦点が置かれて、色という「類」に属する「茶(髪)」という意味で発話されている場合であればシネクドキ表現である。これに対して、「茶髪」と「感じ」との意味関係が、髪「スタイル」に焦点が置かれていて、「スタイル」という「【類】を表す全体」に対して「茶髪によるスタイルの

【一種】である、という意味で発話されている場合は、シネクドキ表現であると判断できる
よう。しかし、「感じ」という意味が「茶髪をしている人全体の感じ」を表現している場合
には、「茶髪」と「感じ」との意味関係は上記の【3】に準じた関係を形成しているという解釈
も成り立つ。このように、「全体一部分」を表現する意味関係によって支えられるメトニミー
とシネクドキの間には、明確な境界線を引くことが難しく、本稿では、二者は連続している可
能性がある点を指摘しておきたい。

3. 0 シネクドキ表現を表すイメージスキーマの試作

3. 1 「X」と「Y」とが形成する意味関係に対する考察

まず、主な「XはYが+述語形容詞」構文を示し、それぞれの「構文」中の「Xは」と「Y
が」とが形成する意味的な関係を併記する。

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| (20) 花は桜がいい。【再掲】 | 【「全体と類」、或いは「集合とメンバー」】 |
| (21) 林さんは髪が長い。【再掲】 | 【全体と部分（固体）】 |
| (22) 日本は温泉が多い。 | 【所在地点と状態の特徴】 |
| (23) A先生は本が少ない。 | 【所有者と所有物】 |
| (24) 伊藤さんは息子さんか賢い。 | 【主体と帰属者（親族）】 |
| (25) 加藤さんは性格が優しい。 | 【主体と属性（性格）】 |
| (26) 佐藤さんは頭がいい。 | 【主体と属性（能力—形容詞句が慣用的表現を示すもの）】 |
| (27) テーブルは角が丸い。 | 【主体と属性（状態）】 |
| (28) 独り者は夜が寂しい。 | 【主体と心的状態】 |
| (29) 今日は風が強い。 | 【主体と属性（発話主体が知覚できるもの）】 |
| (30) 手術は後が痛い。 | 【原因・前提と結果】 |

において、「X」と「Y」とが示す「主体と属性」の関係にも、さまざまな種類のものがある
ことが分かる。(20) 文例以外の構文における「X」「Y」とは「全体—結果」で表される意味
関係にある。そして、この意味関係は「包摂関係」を示していることが見出される。

3. 2 「花」と「桜」とが形成する包摂関係を表すイメージスキーマの試作

イメージとは、心的表象の一種であって、日常的な経験に基づいて形成される。我々人間は
イメージを通して外の世界の対象を把握する。そして、抽象的な対象に直面した時には、状況

に応じて既にもっているイメージを拡張させその拡張させたイメージを介して理解する。そのような創造的な理解には、少なくとも、(1) ある対象に対して具体的なイメージを作り上げていくプロセス、(2) ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス、(3) ある対象のイメージを多角的な視点から組み替えていくプロセス、の三種の認知プロセスが関わっている。我々は、このようにして形成されたイメージとこのイメージに関わる具体的な知識を背景にして、イメージスキーマを作り上げている。¹⁵

註解

スキーマに対する解釈にも異なるものがある。¹⁶ スキーマの構造体は我々人間の経験を組織化する行為であり、動作・行為のパターンを示すのみならず、動作・行為を実際に行うためのパターンを示すものである。しかし、スキーマは視覚によって知覚できる領域に限られてはいない。抽象的な領域においても充分活用できるものなのである。典型的なスキーマの構造体は「意味的な部分と意味的な関係」によって形成される。それらの「部分」の属する主なものには、「人々、仲間、行事、状態、原因、目標」などを含む。これに対して「関係」に属するものには、「単純な関係、普通の関係、暫定的な連続しているものの一連の関係、部分—全体、相対的な地点、動作主—被動作主、道具を仲立ちにした関係」などが含まれる。¹⁷

スキーマは人間の情報処理メカニズムの引導的な機能をもつ。¹⁸ ラネカーのイメージスキーマ理論では、スキーマとは二つの概念をA、Bで表した場合に、AがBによって示される特定の要素と一致しているが細部の精密度にはそれほど対応していない時に、AとBとはスキーマを形成する関係にあると見る。そして、この場合のABの関係は、例えば、Aがタキシノミーの上位レベルに位置していて、Bが下位レベルに位置しているという意味的な関係と同価値にあるものに相当するとみなす。¹⁹

イメージスキーマ理論では推移状態にあるものでもイメージスキーマによって表すことができる。イメージスキーマの典型的な例としては、(1) <容器>のスキーマ、(2) <上・下>のスキーマ、(3) <前・後のスキーマ>、(4) <中心・周辺>スキーマなどがある。レイコフの指摘によると、例えば、(3) のスキーマは我々人間の身体的特徴に基づいて「前後・左右

¹⁵ 山梨正明『認知文法論』1995年、ひつじ書房、p.95—p.96。

¹⁶ Mark Johnson *The Body in Mind—The bodily basis of Meaning, Imagination, and Reason*, 1987, Chicago University Press, p.21.

¹⁷ Mark Johnson *Ibid*, 1987, p.25—p.28.

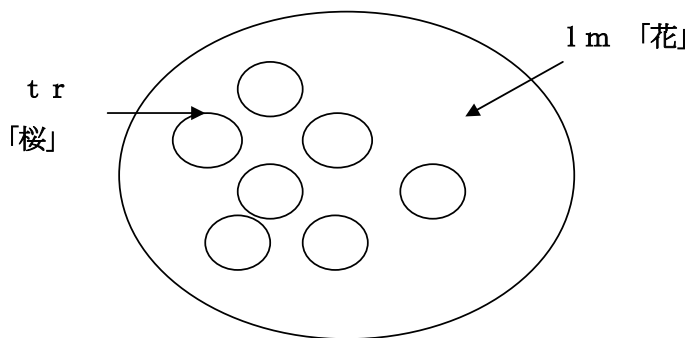
¹⁸ D. Rumelhardt “Notes on a Schema for Stories” 1989, A.M.Collins, eds. *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*, New York Academic Press, p.211—p.236.

¹⁹ G.レイコフ『認知意味論』1999年(増補版) 紀伊国屋書店、p.331—p.355.

の概念」が形成されていることに依拠している。²⁰ また、「Xは YがZ」構文に対しては、容器のスキーマと抽象的な空間領域への参与者 (participant) の関係から一般的に規定されているとみなされている。²¹

「花は桜がいい」構文中の「Xは」と「Yが」とは「集合—メンバー」或いは「全体—部分」という意味関係を形成しているので、全体を<容器>と捉えて部分を<容器の内側にあるもの、或いは容器の一部を成すもの>と捉えられる。或いは、クック説に従えば、「桜」は「花によって表される概念領域への参与者」として捉えることができる。そうすれば、「花」と「桜」によって形成される包摂関係のイメージスキーマを、「<容器>のスキーマ」として筆者が試作したものを、【図 2】として示す。

【図 2】 「花」と「桜」による包摂関係のイメージスキーマ試作図



【図 2】は、「花」は<集合>の概念を表していて、その概念によって支配される「意味領域の範囲（「1 m」）によって示される」の表示、及び、「桜（「t r」によって示される）」を包摂している領域として機能していること、の二点を示している。また、【図 2】において、「1m」はランドマークで「花」という「類」を表している。このランドマークは同時にイメージスキーマの「背景（地の概念）」を表現している。そして、大きい円によって囲まれているスペースは「花」の支配する意味領域を示す。大きい円は「花」の概念を<全体>を意味するとして<容器>に見立てて描かれている。「花」の概念のカテゴリは抽象的な概念なので、領

²⁰ G.レイコフ『前掲書』1999年、p.360—p.365.

²¹ Haruko Cook “Schematic Values of the Japanese Nominal Particles WA and GA in R. A. Geiger & B. Rudka — Ostyn eds., *Topics in Cognitive Linguistics*, 1993, p. 371—p. 397.

域は暗く描かれていない。(具象的な物体の場合は、意味領域は通常暗く描かれる。)円は「花」の下位カテゴリを示すそれぞれ「桜、チューリップ、カトレア、バラ、水仙、・・・」などの花の「種」のイメージである。円が連続しているのは種としての「集団を構成するメンバー」としてのイメージを表す。右上に一つ離れている円は「tr」で表され、トラジェクターと呼ばれる。「tr」は、「前景(図の概念)」を意味表現している「桜」を表す。「桜」は<全体一部分>という意味関係から、「最もいいもの」と評価されて選び出されているが、「地」を表現している「花」の類の外へは出ていない。【図 3】は、集団を構成するメンバー(例えば「桜」)が集団から一つ選ばれても、「花」との包摂関係に基づいて「花」の概念をイメージする<容器>の外へは出ないで、「花」の概念との意味的な包摂関係を保っている状態を示しているのである。

3.3 「花」と「桜」によるシネクドキの形成における認知過程に対する考察

「花は桜がいい」における「花」と「桜」とは、それぞれの異なる二つの概念の間に存在する包摂関係に基づいてシネクドキを形成する。そして、その意味構造は Σ 型および π 型の概念を合わせた総体である。「花は桜だ」というシネクドキ表現の形成における認知プロセスに関して考察すると、「花」と「桜」とが文を成立させて「花は桜だ」と表現する時には、第一に、選択制限の違反の認定が重要な役割をもつ。選択制限の違反の有無は、「花は桜だ」がシネクドキ表現として成り立つ条件の一つであるため重要なのである。その選択制限の違反について認定するためには、まず、「花」の基本的な意味的な内容を特徴づける部分を中核概念として抽出する。中核概念とは「花」を生物学的に特徴づける意味特徴の束の部分である。これに対して、「花」の指示対象でありシネクドキの媒体と成る「桜」を随伴的に特徴づける意味的な構成素はプロトタイプである。

認知プロセスにおける第一ステップとしては、「花」の中核概念と、プロトタイプとして「桜」を特徴づける構成素とを区別することである。「桜」のプロトタイプは顕現特性のスキーマとして表すことができる。顕現特性とは、「桜」の表す概念のプロトタイプの的に特徴づける部分を指す。第二ステップとして、「桜」の概念を表す意味特徴を「花」の中核概念に照らし合わせる。「花」の概念を表す中核概念の中で、「桜」の概念を表す意味特徴として含まれていないもの、すなわち、「『花』としての選択制限に違反している」意味特徴としては、<草花>である。この意味特徴は「桜」の概念を示すプロトタイプとしては合格しない。この点において選択制限の違反が認められる。また、「媒体」である「桜」の概念を支える顕現特性の部

分は、文化・社会的な背景によっても左右されることも、比喩表現における「媒体」としての意味的な特徴を形成する。²² 以上述べた「花」と「桜」の概念を形成するプロトタイプの抽出プロセスを【表 5】に示す。²³

【表 5】に基づいて中核概念を抽出すると、〈生物〉〈植物〉〈花〉である。中核概念と顕現特性（プロトタイプを形成する意味特徴）を表す意味的構成素とを組み合わせるプロトタイプとして認定する。「花」のプロトタイプとしては、初山論文によって〈人目を引く〉〈植物が咲かせる〉〈美しいもの〉が提案されている。²⁴ これらのプロトタイプは、「花」の中核概念である〈生物〉〈植物〉〈花〉を既に含んでいる関係上、本稿では初山論文の提案によるプロトタイプを「花」の概念を表すプロトタイプとして用いる。

【表 5】の示す内容について説明すると、A部のレベルにおいては「花は」・「桜だ」という語句の間にある選択制限の違反の存在を認定する。B部のレベルではプロトタイプの抽出過程における意味特徴の表示、プロトタイプの選択と認定などが操作される。加えて、「桜」の顕現特性の「花は」への転写による「花」の概念体系を再構成が操作される。「再解釈」のプロセスとしては、顕現特性の「花は」への転写による「花」の概念体系を再構成することを介しての「花は」に関する再解釈の過程、として捉えられる。また、再解釈とは、「花」に関する新たな視点を洞察し発見して導入するプロセスである。「桜」の概念を構成するプロトタイプとしては、初山論文による「花」のプロトタイプ、及び、筆者によるアンケート調査から得られた結果によって抽出された、前記の「花」の意味特徴に基づいた。「桜」の意味特徴としては、「〈植物が咲かせる〉〈人目をひく美しいもの〉〈通常春咲きの〉〈香の無い〉〈散り方が派手で〉〈日本を代表する典型的なもの〉」などを、表に記述した。尚、シネクドキシ表現の主題部分である「花は」をAとして、述部である「桜」をBとした場合、シネクドキシの形成プロセスに対する規定には、中核概念を顕現特性のスキーマとして表現できる上に、ある種類(A)に属するもの(B)の関係は、「Aの概念がBの概念を包摂している」点が含まれる。²⁵

²² J.I.Saeed *Semantics* Cambridge, MA: Blackwell Publishers, 1997
E.Kittay *Metaphor—It's Cognitive Force and Linguistic Structure*, Oxford, England: Clarendon Press, 1987.
E.R.MacCormac: *A Cognitive Theory of Metaphor* Cambridge, MA: The MIT Press, 1985

²³ この図は、山梨正明『比喩と理解』1998年 東京大学出版会 によるフォーマットに基づいて筆者が作成したものである。

²⁴ 初山洋介「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」認知言語学フォーラム用のハンドアウト資料 1998年、東京大学、p. 4。

²⁵ 山梨正明『比喩と理解』1998年 東京大学出版会 p.22

次に、「花は」は<集合>の概念を表して、その概念によって支配される意味領域の範囲を示しており、「桜が」を包含している領域として機能していることが分かる。既に「XはYがZ」構文中の主題「Xは」は「背景」を示し、「Yは」は「前景」を示すことは明らかにされているのでその概念も組み入れる。また、述語形容詞の「いい」が表す概念は、ここでは多義性に立ち入らずに「花という類に属している花の内では、桜が最もきれいだ」という意味を示すものとする。

3. 4 「花」「桜」が形成するシネクドキ及び「桜」「雪」が形成するメタファーとの係わり合い方と推論のメカニズムに対する考察

「花」と「桜」によるシネクドキと「桜」と「雪」によるメタファーとの係わり合い方には、シネクドキからメタファーへの移行が発生しているために、推論のプロセスが係わっている。その形成過程について認知意味論的な見地に基づいて考察した結果、形成の各段階における推論を伴った移行のプロセスを、【表 6】に示す。

【表 6】 「花」「桜」から「桜吹雪」の概念形成への変化過程

(1) 経験に基づいた知識として既に蓄積されているもの：

- a. <白い>は<雪>の意味的内部構造に内包されている意味単位。
- b. <吹雪>の意味的内部構造の意味素は、<雪><白い><降る><冷たい><寒い><強風><継続的><冬>などの意味単位。

(2) 「白い花びら群が忙しく散るコト」

↓ 【プロセス 1】(情景の視覚的認知)

白い花びら

↓ 【プロセス 2】(種から類への【提喩】のプロセス)

白いもの =一般化、意味的に見た外延的方向)

↓ 【プロセス 3】(種から類への【提喩】のプロセス=特殊化、意味的内包的方向)

雪 ↓ 【プロセス 4】([<雪><雲>等の白いものから<振る><固体>の意味的制限によって<雪>を選択])

白い花びら群が忙しく散る情景

↓ 【プロセス 5】(継続的な視覚的認知行為によって吹雪を連想)

吹雪 ↓ 【プロセス 6】(「吹雪」と「白い桜の花びら群が忙しく散る有様」間に類似性を見出して、関連性により「桜が忙しく散る有様は吹雪のよう

を形成してメタファー表現として派生する変化過程を、前述の佐藤説・楠見説及び認知意味論的な見地に基づいて分析・考察した結果、その変化過程を表として示した。結論として、シネクドキとメトニミーとが、或いは、シネクドキとメタファーとが、全ての意味関係ではないかも知れないとしても、意味的に連続している可能性があるものも見出せた点を指摘しておきたい。

4.0 共感覚的比喩表現を支える意味構造に対する分析と考察

この章では、味覚形容詞「甘い」「辛い」の表示する多義性を中心に分析し、「甘い」「辛い」の表す「基本義」からそれぞれの多義的別義を生じせしめる意味的拡張・転用に基ついた意味変換のプロセスを明らかにする。共感覚的比喩表現とは多義性的一种であるという視点に立つて、基本義と多義的別義の間に存在する意味関係が如何に多義的別義の意味的拡張・転用に係わっているかという点、及び、基本義とそれぞれの多義的別義の間に存在する意味的な相互関連性を指摘して、共感覚的比喩表現の意味構造のメカニズムを解明する糸口を考察することにある。研究方法は主に認知意味論の理論に基づいて分析・考察を行う。尚、本稿における文例は筆者による作例である。

共感覚的比喩表現に関する先行研究としては、1976年にウィリアムス(Williams)による「共感覚的比喩表現を表す形容詞—意味的な変化に対する規則の可能性—」というテーマの論文が発表された。²⁶ この論文によって、共感覚比喩表現に対する研究の指針が示された。日本語の分野における先行研究としては、国廣、山田、森、小森、楠見、山梨などによる優れた研究があるが、今日までに発表された論文の数は多くはない。²⁷ 就中、味覚形容詞の意味的な拡張を中心に分析されたものは非常に少ない。そのため、この論文のテーマである味覚形容詞「甘い」「辛い」の表すそれぞれの多義性が、「甘い」「辛い」の基本義からどのように意味的に拡張されているかについて分析した上で、その拡張のメカニズムを明らかにすることは、共感覚的比喩表現を支える意味構造がどのような仕組みになっているかを解明する糸口となる可能性があるだろう。

²⁶ Williams, Joseph M. "Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change," *LANGUAGE* 52:2, 1976, p.461—p.477.

²⁷ 山梨正明『比喩と理解』(認知科学選書 17)、東京大学出版会、1988。山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』40、徳島大学英語英文学会、1993。

小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29—3。国廣哲彌「五感を表す語彙—共感覚的比喩体系」『月間言語』18—11、大修館書店、1995。森貞「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、福井工業専門学校、1995。楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、1995。など。

4. 1 共感覚比喩の示す特殊性に対する考察

言語学において用いる「共感覚比喩」とは、一般的には心理的現象の「共感覚」が基底にある比喩を指す。「共感覚」とはもともと心理学用語で、ある刺激に対してその本来の感覚に他の感覚が伴って生じる現象を表すが、言語学では、ある領域の感覚を表す形式を用いて他の領域の感覚を表すことをいう。亀井他によれば、共感覚的比喩表現は「比喩の一種で、意味変化の原因の一つ」である。²⁸ また、ある感覚領域を表す語が別の感覚領域に転用される場合、例えば、「甘い」は本来味覚を表すものに適用される語であり、「声」は聴覚の領域に係わっているので、「甘い声」という「隣接性」に基づいた共感覚的比喩表現は〈味覚〉—〈聴覚〉という結びつきになっている。²⁹ この論理に基づく、共感覚比喩とは、「視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚」という五感の内のある感覚領域を表す語の意味が、別の感覚領域に係わる意味に、「類似性」或いは「隣接性」に基づいて拡張・転用されて表現されたものであると定義できよう。

次に、共感覚比喩はメタファー（隠喩）、シネクドキー（提喩）、メトニミー（喚喩）などの一般的な比喩とは異なった特殊性を示す。その特殊性の第一としては、「一方向性」を示す性質を有することである。芋阪編は、「共鳴や共感覚の生起には方向性があり、聴覚から視覚に向かう方向が、その逆よりも影響を検出しやすい」と指摘する。³⁰ この点に関して、ウルマン（Ullmann）は、19世紀のロマン派詩人11名の作品から2009例の共感覚的比喩表現を採集して共時的に分析した結果、「転移は感覚中枢脳の下域から上域へ、あまり分化していない感覚から一層分化しているものへ昇っていく傾向があつて、その逆ではない」という、「上昇移行説」を提起した。³¹ ウィリアムスも「一方向性肯定説」を支持する立場に立つ。³²

共感覚的比喩表現が「一方向性」を示すかどうかに関しては、「一方向性肯定説」に同意する山梨説、³³ 「一方向性は見出されるも、光と色とを分ける必要がある」とする山田説、³⁴ 「一方向性肯定説」に反対する立場に立つ森説、³⁵ の三説に分かれる。以下、これらの三説に対し

²⁸ 亀井孝他 『言語学大辞典』、三省堂、1996、p.286。

²⁹ 池上嘉彦 『英語学コース第4巻 意味論・文体論』、大修館書店、1985、p. 99。

³⁰ 芋阪良二編 『感覚』（講座心理学 第3巻）、東京大学出版会、1969、p. 275。

³¹ ウルマン、(Ullmann, S.) 山口秀夫訳 『意味論』、紀伊国屋書店、1964、p. 287、及び、安井 稔 『言外の意味』大修館書店、1978、p130-131（ウルマンによる上昇移行説を引用）。

³² Williams, Joseph M. "Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change," *LANGUAGE*:52:2, 1976, p. 461-p. 477.

³³ 山梨正明 『比喩と理解』（認知科学選書 17）、東京大学出版会、1988、p. 58。

³⁴ 山田仁子 「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容詞表現の分析」『HYPERION』40、徳島大学英語英文学会、1993、p. 29-p. 40。

³⁵ 森 貞 「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、福井工業専門学校、1995、p. 251-p. 267。

て比較しながら考察する。

第一に、山梨説は「共感覚—原感覚の修飾の関係が触覚から味覚、嗅覚へと一方向的であり、この逆方向の修飾関係は認められない」と結論付けた。³⁶ 楠見説、国廣説、山田説なども「一方向性肯定説」を支持する立場を取る。³⁷ 一方、「一方向性肯定説」を基本的には支持する立場を取りながら、色と光とを分ける必要があることを指摘するのは山田説で、その理論的根拠としては、次元形容詞の位置を除いた、ある感覚形容詞の意味が、「触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚」の順に意味的に拡張・転用する過程を示すとしている。以上の「一方向性肯定説」に対して、森説は「一方向性否定説」を提起し、小森説・村田説も「一方向性肯定説」に対して部分的に疑問を提起する。³⁸

共感覚比喩の示す特殊性の第二としては、それが比喩表現ではあっても、メタファーなどの一般的な比喩とは別のカテゴリに分類される点である。心理学的な視点に立つ楠見説では、共感覚比喩を直喩及びメタファーの一種であるとは見なさずに別のカテゴリとみなすが、構造的には「類似性」に基づいた直喩及びメタファーの構造と共通したものを呈する点を指摘して、【表 7】のように示した。³⁹

【表 7】 比喩の処理構造を支える意味構造の区分

	カテゴリ的意味	情緒・感覚的意味	スクリプト的意味
関係	包含関係	類似関係	隣接関係
内容	辞書的意味	連想的意味	場面・台本に関する意味
課題	分類	連想	空間的・時系列的連想
一義性	一義的	多義的	定数と変数
構造	階層的	非階層的	階層・時系列構造
	ツリー構造	リズム構造	ツリー構造
比喩	提喩 (シネク ドキ)	直喩・隠喩 共感覚的比喩	喚喩 (メトニミー)

³⁶ 山梨正明『比喩と理解』（認知科学選書 17）、東京大学出版会、1988、p. 60。

³⁷ 楠見 孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、1995、及び、国廣哲彌「五感を表す語彙—共感覚的比喩体系」『月間言語』18—11、大修館書店、1995、p. 29—p. 31。

³⁸ 小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29—3、大阪樟蔭女子大学、1993、p. 64、及び、村田忠男「<触覚>さわることば—ウルマンのデータを中心に」『月間言語』18—11、大修館書店、1989、p. 62—p. 67。

³⁹ 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、1995、p. 19。

もともとの意味から新たに派生した共感覚的比喩表現は両者の間に存在する意味的な「類似関係」に基づくとする楠見説に対して、小森説及び山田説などは、共感覚表現が人間の身体的構造との関係において、意味的に「類似関係」ではなく、現実のなかの「隣接性」によって結びついているとみてメトニミーと関連性が深い点を指摘する。⁴⁰ 本稿は、基本義から多義的別義へ意味的に拡張・転用する際に、もともとの意味と変化・派生した意味の二つの間にどのような意味的な関係が係わっているかを分析する必要があるという立場に立って考察を進めていく。

以上、共感覚比喩を巡る諸問題に関して考察した。これらの問題に関しては未だ統一の見解には至っておらず、加えて、共感覚比喩の意味的構造も解明されていないのが現状である。

4. 2 「甘い」の味覚領域以外の他の領域における意味的拡張・転用に対する分析と考察

4. 2. 1 味覚語彙体系における「甘い」の占める位置に対する考察

味覚形容詞には、一般的には、「甘い、辛い、酸っぱい、苦い、渋い」の五つがある。これらの味覚形容詞に加えて、形容詞「しつこい、えぐい」、及び非形容詞的な表現法である「あっさりした、こくのある」というも味覚を表すので、本項ではこれらの表現法も研究対象に加えて考察を進める。

五つの基本的な味覚形容詞の「甘い、辛い、酸っぱい、苦い、渋い」の間には、相互に関連した意味的な関係が見出される。その意味的な相互関係について、国廣は英語における「味覚語彙の体系」を示すものとして、「Henning の味の正四面体」を例にとりて【図 3】のように示す。⁴¹

もともとの意味から新たに派生した共感覚的比喩表現は両者の間に存在する意味的な「類似関係」に基づくとする楠見説に対して、小森説及び山田説などは、共感覚表現が人間の身体的構造との関係において、意味的に「類似関係」ではなく、現実のなかの「隣接性」によって結びついているとみて、メトニミーと関連性が深い点を指摘する。⁴² また、柴田は日本語におけ

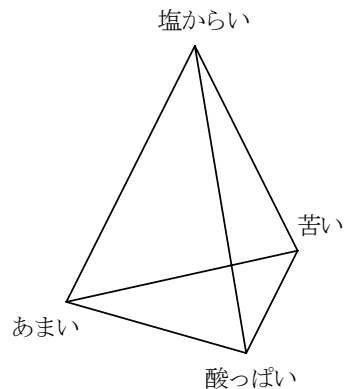
⁴⁰小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29-3、大阪樟蔭女子大学、1993、p. 64、及び、山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』40、徳島大学英語英文学会、1993、P. 29—p. 40。

⁴¹ 国廣哲彌『意味論の方法』、大修館書店、1982、p. 150。

⁴²小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29-3、大阪樟蔭女子大学、1993、p. 64、及び、山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』40、徳島大学英語英文学

る「味覚形容詞の意味的な相互関連」について、融和できる味と融和できない味という差異に基づいて分析した。そして、「甘い」と「辛い」は相対立する味であることを示すが、これら両者は「甘辛い」という複合形容詞が派生したように融和できる味でもあることを指摘した。また、「甘い」と「酸っぱい」も同様である。

【図 3】 Henning の味の正四面体



しかし、「甘い」と「苦い」、「辛い」と「酸っぱい」の二組は互いに融合できない。この分析に基づいて、柴田は[「甘い」「辛い」の関係は、「甘い」と「酸っぱい」の関係と同じ価値のものといえる]と結論付けている。⁴³ また、なぜ、「甘い」と「渋い」が直接繋がるかという点について、柴田説は、『渋い』は柿の[アマガキ・シブガキ]のペアがあることを考慮すると、アマイと直接繋がる場所にシブイがあると考えられる」と指摘する。⁴⁴

以上の考察に基づくと、結論として、「甘い」の対義語としては「辛い、酸っぱい、渋い」の三つが導き出される。

4. 2. 2 「甘い」の表現する意味の拡張・転用に対する分析と考察

まず、五感を表す形容語によって表示される意味が、「味覚」の領域から他の「視覚、聴覚、嗅覚、触覚」領域においてどのように拡張・転用するかについて、【表 8】に示す。

会、1993、P. 29—p. 40。

⁴³ 柴田 武『日本語はおもしろい』、岩波書店、1995年、p. 89—p. 90。

⁴⁴ 柴田 武『前掲書』、p. 90—p. 91。

【表 8】 感覚モダリティと感覚形容語の組み合わせ

「味覚」から

視覚へ	しづい色、あまい色、しつこい色、あっさりした色
聴覚へ	しづい音、あまい音、しつこい音、あっさりした音
嗅覚へ	すっぱいにおい、あまいにおい、しつこい匂い、あっさりしたにおい
触覚へ	あまい感触、しつこい感触、あっさりした感触

【表 8】に記載されている内容のうち、「あまい感触、しつこい感触、あっさりした感触」などの「味覚」から「触覚」への意味的転用は、新しい共感覚的表現であり、従来の日本語による表現にはあまり見られない。共感覚比喩の「味覚」領域に係わる原意味が、意味的転用によって「触覚」という新しい、味覚以外の領域に係わる意味へと拡張・転用すること、結果として、新しい共感覚比喩表現が生み出されていること、の二点が明らかになる。

関連して、Backhouse は日本語の「甘い」によって表される意味は二つの方向に拡張していると指摘する。一つは、「快い」という身体的な快感に係わる方向、そしてもう一つは「何かが不足していて充分ではない」という、心理的不満感や不安感に係わる否定的な評価の方向、という二つの方向である。⁴⁵ これは、「甘い」の表す基本義である「砂糖や蜜のように甘いという味覚」から、「甘い判断」のように評価に係わる「抽象的な領域」に係わる意味へと意味的に拡張・転用していることを示すことに外ならない。

これに対して、Jantima は英語の「sweet」には「否定的な評価の意味が存在しない」と指摘する。⁴⁶ 例えば、

(31) She is so sweet.

のように英語によって表現された場合は、「彼女は甘い—彼女は人当たりがよくて感じのいい人だ」という肯定的な表現であり、しばしば彼女を褒める場合に用いられる。これに対して、「彼女と恋愛関係にある相手以外の人」が日本語を用いて、

(32) 彼女は甘い。

⁴⁵ Backhouse, A. E. *The Lexical Field of taste: A Semantic Study of Japanese Taste Terms*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994, p. 155.

⁴⁶ Jantima, Jantra. 「日本語形容詞『あまい』の意味拡張と広告における多義的使用の分析—英語< sweet >及びタイ語< waan >と対照しながら—」『DYNAMIS』3、京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座、1999、p. 142—p. 193.

と表現した場合は、「彼女は判断力・予想力が弱い」という否定的な意味が表現される場合が多い。

次に、日本語における「甘い」の意味が否定的な意味へと拡張・転用されるのは、どのような条件下においてどのような要素に依拠するのかという問題について、考察する。

まず、味覚領域における「甘い」のふるまいに関して考察する。「甘い」と「辛い」が対義関係にあるとして捉えると、「甘くない」味を一つの形容詞によっては表現できない。

(33) この和菓子は甘い。

(34) *あの和菓子は辛い。【以下、*は「非文」を示す。】

において、(34)の文例は日本語でも英語でも表現できない。(33)(34)の場合には、「甘い」と「辛い」は意味的にそれぞれの意味領域を侵しておらず、対等の関係によってバランスが保たれているが、下記の場合にはそうではない。

(35) この料理は甘辛く煮付けてある。

(36) *この料理は辛甘く煮付けてある。

において、(35)文中の「甘辛い」は表現できるが、(36)文中のように「辛甘い」とは表現できない。これによって、「甘さの感じられる辛さ」は一つの味覚形容詞或いは複合形容詞によって表現できるが、「辛さの感じられる甘さ」は一つの味覚形容詞或いは複合形容詞によって表現できない。

加えて、「甘い」の表現する意味領域と「辛い」の表現する意味領域の関係について更に考察すれば、「辛い」の意味領域が「甘い」の意味領域に進入して拡張しているふるまいが観察できよう。この場合は、両者の意味領域は対等ではない。従って、(33)(34)の二文例によって示されている「甘い—辛い」の対義関係は、(35)(36)の二文例によって示されている条件下においては「対等でなくなる現象」が導き出されよう。このような【「意味的な対義関係」がある条件下によって「対義関係ではなくなる段階へと移行する】というふるまいが、日本語の「甘い—辛い」に見出されるのである。これは、英語の「sweet—salty」には見出されない現象であると思われる。

一方、日本語の「甘い—酸っぱい」の関係について考えてみると、この関係には、「甘酸っぱい」という表現が可能であり、「甘さの感じられる酸っぱさ」である味覚を表現できる。これに対応する英語には、「sweet—sour」と言う表現があるが、英語による表現の方は、「甘さ」と「酸っぱさ」が同等に混合した味覚を表現している点に、日本語のニュアンスとは異なる差異が感じられる。この意味上の差異が如何に生じるかについては、日本語においては二つの形

容詞を組み合わせる新たな複合形容詞を形成する場合には、二つの異なる形容詞によって表現される意味の内、発話者がより強く表現したいと思う意味を第二の形容詞によって表現することに依拠するものと考えられる。これに対して、英語の場合には、二つの形容詞によって表現される意味は対等である。もし、発話者がどちらかの意味をより強く表現したい場合には、通常、日本語のように一つの複合形容詞によって表現せずに、一文を用いてどちらの形容詞の意味を他方の形容詞の意味より強く表現したいかを明確に具現化する。この事実、英語においては、日本語とは異なって、二つの異なる形容詞によって表現される「意味的な対義関係」が、ある条件下によって「対義関係ではなくなる段階へと移行する」というふるまいが見出されないことを意味している。

ただし、日本語にみられるこのような言語現象によっても、味覚領域に係わる「甘い」の概念によって表現される意味は「味覚に対する否定的な意味」を表現しているわけではない。「甘い」を用いて、「味覚に対して否定的な意味」を表現したい場合には、通常、「甘過ぎる」という複合動詞を用いて表現することによっても、「甘い」が「味覚に対して否定的な意味」を表現しないことが明白であろう。

次に、嗅覚領域における「甘い」のふるまいを考察する。

(37) 花畑には甘い香りが漂っている。

(38) ?花畑には甘くない香りが漂っている。

において、「甘い」が臭覚を表現する場合、反対語として「甘くない香り」とはどんな香りかを一つの形容詞を用いて「対義語」として表現できない。もし、「甘くない香り」を一つの形容詞を用いて表現するとしたならば、『変な香り』であろう。もし、『変な香り』が成立すると仮定したならば、『変だ』は嗅覚領域に係わる「甘い」の対義語になり、「甘い—『変だ』」という対義関係が存在することになる。しかし、『変な香り』とはどんな匂いかについて、更に何か例えて説明しなければ聞き手に正しく伝えることができないから、『変だ』の対義語として「甘い」を捉えるのは難しい。従って、この組み合わせが成立するには、文脈によらなければならないか、或いは、成立する条件がよほど明確でなければ成立するのは容易ではないであろう。以上を総合すると、嗅覚領域における「甘い」の概念によって表現される意味は、「否定的な意味合い」を表現しないと思われる。

それでは、恋愛関係に関する領域では、「甘い」はどんなふるまいをするか。下記の諸文例をみられたい。

(39) あの二人は甘い関係にある。

(40) *あの二人は辛い関係にある。

(41) *あの二人は変な関係にある。

(42) あの二人は冷たい関係にある。

において、恋愛関係に関する領域では、「甘い」の意味は「愛の関係としては当事者が愛し合っている親密な関係」であるという意味概念を表現している。その上、「甘い関係」でなければ、即「冷たい関係」なのであるから、「甘い」の「対義語」に当たる形容詞は「冷たい」である。「甘い—冷たい」のそれぞれの表現によって表される意味の間には、前述したような【二つの異なる形容詞によって表現される「意味的な対義関係」がある条件下によって「対義関係ではなくなる段階へと移行する】というふるまいは見出されない。従って、恋愛関係に関する領域では、「甘い」と「冷たい」によって表現される意味は、それぞれの意味領域を侵さずに意味的には対等な関係にある点、及び、「甘い」の意味には「否定的な意味合い」は含まれないことが観察できよう。

次に、行動領域における「甘い」のふるまいを考察する。

(43) 日本のサッカーチームは守りが甘い。

(44) *日本のサッカーチームは守りが冷たい。

(45) 日本のサッカーチームは守りが堅い。

において、「守りが堅い」が達成すべき当然の基準であるならば、「甘い—堅い」の対義関係においては、「甘い」が否定的な意味を表現している点が観察される。そして、その「否定的な意味での甘さ」の程度とは、「堅い」の表現する意味概念と相対的である点を指摘したい。

(46) 加藤夫人は子供の躰が甘い。

(47) *加藤夫人は子供の躰が冷たい。

(48) *加藤夫人は子供の躰が堅い。

(49) 加藤夫人は子供の躰が厳しい。

において、「子供に対する躰が厳しい」ことが理想的であると見なす価値判断のある社会においては、「甘い」は否定的な意味を表現していることになる。この場合の「否定的な意味での甘さ」が表現する「程度」は、「(躰が) 厳しい」に対して相対的に捉えられるものである。

(50) あの先生は点が甘い。

(51) *あの先生は点が冷たい。

(52) あの先生は点が辛い。

において、「甘い—辛い」の対義関係は、「ちょうど良い」という判断基準の下に対等の関係に

あるものと考えられる。この場合の「甘い」の表す意味が「否定的」であるかどうかは、先行する文脈によらなければ明確には判断できないが、一般的には、「甘い」も「辛い」も「否定的な意味」を表現する機会が多いケースであると言えよう。

以上の考察に基づけば、行動領域における「甘い」の表現する意味には、部分的ではあるが、「否定的な意味合い」表現が見出される点、及び、その否定的な「程度」は対義関係にある語の表現する意味概念と相対的に捉えられるものである点、などが観察できよう。

次に、抽象的な領域における「甘い」に対して考察する。

- (53) 台湾の経済情勢に対するあなたの判断は甘い。
- (54) 席次は第一番目で卒業しようとは、甘い望みだ。
- (55) うまい儲け話に騙されるなんて、あなたも甘いね。
- (56) 世の中を甘く見てはいけない。

において、(54) 文における「甘い」は、「判断が不的確なこと」、(55) 文の「甘い」は「実現不可能な望みのこと」、(56) 文の「甘い」は「深く考慮せず騙されやすいさま」、(57) 文の「甘い」は「真面目に考えないで軽く考えること」、などの意味をそれぞれ表現している。そして、これらの異なる意味の間に共通している点は、「明確に否定的な意味合い」の表現である。従って、「甘い」は、抽象的な領域では、基本義による「肯定的な意味」表現から「否定的な意味」表現へと全面的に変化している点が観察できよう。

4. 2. 3 「甘い」の多義性に対する分析と考察

まず、「甘い」の基本義（多義的別義[1]）を考察する。

- (57) 和菓子が甘いのは、苦い抹茶を飲む時に食べるからだ。

における「甘い」の表す概念は、＜糖分に対する＞＜感覚的に快い＞＜好ましい味＞という意味特徴によって構成される概念である。この基本義には「否定的な意味合い」は含まれない。

「甘い」に否定的な意味を含ませる際には、「甘過ぎる」という複合動詞によって表現することになる。

次に、多義的別義[2]としては、

- (58) マリーさんの家を訪問すると、ケーキを焼く甘い匂いがした。

における「甘い」の示す＜食物の発する＞＜感覚的に快い＞＜好ましい匂い＞という意味特徴によって表される概念である。この多義的別義[2]では「甘い」の表す概念が味覚領域から嗅覚領域へと拡張している。「甘い」の多義的別義[3]としては、＜辛み味が＞＜相対的に

不十分で弱いさま>という意味特徴によって構成される概念である。

(59) この白菜料理は甘口醤油を加えると、味がより引き立ちます。

(60) 外国人の留学生に「甘塩の鮭ってどんな鮭か」と聞かれてどう説明したらいいのかわかった。

における「甘い、甘+名詞」の表現する概念の「甘さ」は、基本義の表現する概念よりも、「甘さが弱め」である。しかも、「甘塩」に見られるように、「甘さ」のみならず「塩辛さ」の弱さも含んでいる概念である。従って、基本義から意味的に拡張して派生したものと考えられよう。

多義的別義 [4] は、<五感の感覚領域における><食物以外のものが発する><感覚的に快い><香り・音・感触・表情>という意味特徴によって構成される概念である。「甘い」の表す概念が、味覚領域から「視覚、聴覚、嗅覚、触覚」などの他の五感領域に拡張して、基本義及び多義的別義 [2] とは異なる意味・概念を表現する。

(61) 公園の花壇にはいろいろな花が咲き乱れていて、花の甘い匂いが辺り一面に漂っている。(嗅覚)

において、「甘い」の表す概念が味覚領域から嗅覚領域へと拡張している点が観察できよう。多義的別義 [2] との差異については、別義 [2] においては、主に糖分を含んだ菓子類が発する匂いを「甘い」と表現しているのに対して、別義 [4] においては、匂いを発する主体が味覚領域に係わらない食物以外のものである点である。また、嗅覚には、「鼻をつくような鋭い匂い、臭い匂い」などの好ましくないものも含まれている。「甘い」によって表される匂いは、感覚的に快くて、我々に「糖分」を連想させる好ましい匂いである。従って、「甘い」が「味覚」から「嗅覚」へと意味が拡張しているメカニズムには「隣接性」に基づいたメトニミーが基底に存在しているものと考えられる。

(62) 林さんは甘い表情で男性社員を魅了する。(視覚)

(63) 恋人は甘い声で私にささやいた。(聴覚)

(64) 部屋は女の子の甘い匂いに満ちていた。(嗅覚)

(65) 子犬の毛に触れると、甘い感触が広がった。(触覚)

において、(64) 文における「(女の子の) 甘い匂い」と、多義的別義 [2] の「(ケーキを焼く) 甘い匂い」との間には、抽象度の高低の差異がある。すなわち、「(ケーキを焼く) 甘い匂い」は聞き手に「直接的に基本義を連想させる」ので抽象度は低いが、「(女の子の) 甘い匂い」の方は「(思春期の) 女の子の刺激的な快い匂い」を表現しており、抽象度が高い。

多義的別義 [5] は、<人に快さを感じさせる><甘美で好ましい><刺激・感覚・行為・

状態>という意味特徴によって構成される概念である。

(66) 受験前は、甘い誘惑に乗ってはいけない。(行為)

において、「誘惑」は行為を表現しているが、同時に感覚的に「刺激」を与える源である。「誘う」という「行為」が起点となって、それによって引き起こされる「快い刺激」が到達点を成す。その「起点―到達点」という「誘惑のプロセス全体」を「甘い誘惑」によって表現しているケースであると考えられる。

(67) 病床にある私に届いた花束には、彼が自筆で甘い詩を書き付けたカードが付いていた。における「甘い」は、「詩の内容」を指している。

関連して、多義的別義 [6] は、<恋愛関係の領域において><その関係にある二人が醸し出す><感覚的に甘美で快い><親密な雰囲気・状態>という意味特徴によって構成される概念である。

(68) 愛する彼女が私に触れると、甘いムードが漂った。

次に、「甘い」の多義的別義 [7] は、<五感以外の領域における><感覚的に快くても><好ましくない刺激>という意味特徴によって構成される概念である。

(69) 売り手の言葉があまりに甘いので、反って警戒して結局それを買わなかった。

における「甘い」は、「言葉の性質」を表現している。そして、「甘い」の概念は「肯定的な意味合い」表現から「否定的な意味合い」表現へと移行しているのが観察されよう。このような状態は、認知意味論的には「二つの意味が連続的に移行しているプロセス」と捉えられる状態である。

多義的別義 [8] は、<状態・行為が><十分に固くしっかりしていなくて><ゆるいさま>という意味特徴によって構成される概念である。

(70) あのブランドの毛糸はよりが甘い。

多義的別義 [9] は、<判断・思考領域における><ある基準・目的に達しない><欠如した状態・さま>という意味特徴によって構成される概念である。

(71) 急カーブを曲がり切れるという甘い判断が事故につながった。

(72) 宝くじで一億円当たったら何を買おうかという甘い夢は、いつもくじにはずれて破れるのである。

(73) 今日の野球の試合に負けたのは、投手が肝心な時に甘い球を投げ、その上甘い守備だったからだ。

において、(71) から (73) における「甘い」は、判断・思考領域におけるある基準・目的に

達しない欠如した状態を表現している。これらの文例中の「甘い」は抽象的なものを表現しており、完全に否定的な意味合いを表現していることが観察されよう。この抽象的な領域においては、「甘い」の表す意味概念は、「肯定的な意味合い」表現から「否定的な意味合い」表現へと、拡張・転用したと思われる。

また、(73) 文中の「甘い球」の対義語が「臭い球」であり、「甘い守り」の対義語が「堅い守り」であるのは興味深い点である。「甘い」の外に、他の味覚形容詞の示す意味構造に対する分析の必要性がある点を指摘しておきたい。

多義的別義 [10] は、〈行為の対象者に対して〉〈ある基準・目的に照らして〉〈厳しさが欠如した態度・状態・さま〉という意味特徴によって構成される概念である。

(74) 子供に甘い親の態度を、「親バカ」と称するのだ。

において、「甘い」が表現する意味は、「本来、子供を厳しく躾るのが親の責任であるにも係わらず、厳しさが欠如している親の態度」である。ただし、この場合の「甘い」の意味は、「厳しく躾るのはいいことだ」という判断基準に照らし合わせて相対的に捉えられるものとなる。

最後に、「甘い」の多義的別義 [11] は、〈ある状態において〉〈ある基準・目的に照らして〉〈厳しさが欠如した態度・状態・さま〉という意味特徴によって構成される概念である。別義 [10] が「行為の対象者」に対する態度であったが、別義 [11] は、「行為の対象者」を表す意味特徴を含まない。その意味特徴は「ある状態」を表現する意味特徴に変換されている。下記の例を見られたい。

(75) 君は金持ちだから、甘い人生を送っているのだね。

以上、「甘い」の多義性に対して認知意味論的な立場から分析・考察した。

4. 2. 4 現代語の「からい」の多義性に対する分析と考察

「からい」の基本義は、

(76) この味噌汁はからい。

における〈身体の器官の舌を激しく刺激して〉〈感覚的に不快で好ましくなく〉〈塩味が強いさま〉という意味特徴によって構成される「舌に激しい刺激を与える塩味が強い味」を表す概念である。この基本義には「肯定的な意味合い」は含まれない。「からさの程度」について考察すれば、

(77) 塩漬けの鮭は（塩）から（鹹）い。

の文例による「からさ」の方が、(76) の文例による「からさ」よりも、聞き手にとって「か

らさ」の程度と否定的な意味合いが(76)文中の「からい」よりも強く感じられる原因としては、(76)の文例に見出される「(塩)からい」については、第一に、「塩」が液体に溶けているため視覚によって認知するのが困難であること、第二に「味噌汁のからさ」については、「からそうな味噌汁」という「見かけによる判断」によるか、若しくは、直接的に味見しなければ「からさ」を判断するのが困難であることに対して、(77)の文例における「(塩)からい」については、「塩」という具象物を人は視覚によって認知することができるため、実際に「塩漬けの鮭」を見ていなくても「塩漬けの鮭のからさ」を感覚的に再現させて把握するのが容易であること、などを上げることができよう。また、塩味がほどよくて好ましい味を表現する際には、通常「からい」は用いられない。下記の二文例を見られたい。

(78) - a この味噌汁はほどよい味だ。

(78) - b この味噌汁は(味が)ちょうどよい。

関連して、基本義から多義的別義[2]へと拡張している概念は下記の(79)文に見出される。

(79) キムチはピリ(唐がらし)からい。

における「ピリ(唐がらし)からい」の表す概念は、<舌を激しく刺激して><感覚的に痺れるような><唐がらしの匂いに包まれたピリピリした唐がらしのから味が強いさま>という意味特徴によって構成される「ピリ(唐がらし)からい」である。この多義的別義- [2]が表す概念を支える意味特徴の中には、<感覚的に不快で><好ましくない>という否定的な意味を表現する意味特徴は含まれない。「ピリ(唐がらし)からさ」を不快か不快ではないか、或いは、好ましいか好ましくないか、のどちらに感じるかに関しては、「個人的な基準による好みの程度の差」によって左右される上に、「感覚的に舌が痺れるようなピリピリしたから味」を不快に感ぜずに、むしろ好ましく感じる人も存在するのは事実であるからである。

この多義的別義[2]が表す「(ピリ)からい」のカテゴリーには、「ピリ(唐がらし)から味」に加えて、異なる種類の「からい」の概念を下位分類することができる。下記を見られたい。

(80) この店のにぎり寿司はわさびがよくきいていて、ツーンと(わさび)からい。

における「(わさび)からい」という多義的別義-[3]の表す概念を支える意味構造は、<舌・鼻・涙腺を急激に激しく刺激して><感覚的に舌が痺れるような><強く残るツーンとしたわさびの匂いに包まれたわさびのから味が強いさま>という意味特徴によって構成される。実際には、我々は「わさび」のからさをまず嗅覚で認知して、「(わさび)からい」という味覚の再現をしつつ舌で味わっている場合が多いと考えられる。この「(わさび)からい」を多義的別義[3]として分類する。

(81) 今晚、友達が作ったカレーは激からだ。

における「激からだ」とは、からさの程度が特に強くて激しいものを指す。「(カレー) からい」とは、ピリから味にカレーのからさが加わった味で、その味覚の概念を支える意味構造は、<舌・鼻を強く激しく刺激して><感覚的に舌が痺れるような><カレーの香りに包まれたカレーのから味が強いさま>という意味特徴によって構成される。この「(カレー) からい」を多義的別義[4]として分類する。

(82) 野菜スープに胡椒を振りかけたからからい。

における「(胡椒) からい」の概念は、<舌にピリッとする刺激を与えて><その刺激が軽くて舌に長く残らず><感覚が快い胡椒のから味が強いさま>という意味特徴の組み合わせによって構成される。この「からい」の表す概念は、多義的別義[5]と分類できよう。

(83) ハンバーグにつけた芥子がからい。

における「(芥子) からい」の概念は、<舌にピリッとする刺激を与えて><感覚が不快ではなく><芥子の香りに包まれた芥子のから味が強いさま>という意味特徴によって構成される多義的別義[6]である。

(84) 寿司の横に置かれたつまの生姜が、甘酸っぱく生姜からい。

における「(生姜) からい」の概念を支える意味構造は、<舌・鼻を刺激して><感覚的に僅かに舌が痺れるような><ピリッとした甘酸っぱい生姜のから味が強いさま>という意味特徴によって構成される。この概念は多義的別義[7]と分類できよう。

(85) 今年漬けたらっきょうはからい。

における、「(らっきょう) からさ」の概念は、<舌をピリッと強く刺激して><酸味が強いらっきょうのから味が強いさま>という意味特徴によって構成される多義的別義[8]である。本稿では、この種の「ピリからさ」を伴った「酸味の強い味」も「からい」の表す概念の範疇に含まれるとの視点に同意する。⁴⁷

以上、「ピリからい」系統に属する基本義から多義的別義[8]までのそれぞれの別義の間に存在する意味的な関係は、「家族的類似性」によって互いに係わりあっていると考えられる。家族的類似性とは、ウィトゲンシュタイン (Wittgenstein) が1958年に提起した説で、例えば、さまざまなゲームが網の目のように少しずつ重なり合う類似性によって相互に関連しあっていることを指す。ロッシュとマービス説の定義によれば、家族的類似性とは、「AB、BC、CD、DE」という形で関連し合う一連の項目であり、個々の項目は他のいくつかの項目と少なく

⁴⁷ 新村出編「広辞苑」、岩波書店、1990年、p. 464。

とも一つ、たいていは数個の要素を共有するが、全ての項目に共通の要素となると存在しないか、稀にしか存在しない」と見なす。⁴⁸ ロッシュの定義における「要素」を「意味特徴」と置き換えてみれば、本稿において前述した基本義から多義的別義[8]までのそれぞれの別義の間に存在する意味的な関係が、「家族的類似性」によって互いに関連しあっていることがより明白になろう。

また、山梨説による家族的類似性とは、ある「語」の基本義及びそれぞれの多義的別義をA、B、C、D、Eとした場合、これらの意味は、AからB、BからC、CからD、DからEというように、同じ意味カテゴリー内の多義性の連鎖（ないしは多義性のリンク）によって関連づけられていると定義する。⁴⁹

次に、塩からくもなくピリからくもないが、独自の香りとからさを有する存在物の呈する「からさ」について考察する。

(86) 先月収穫された大根はからい。

における「(大根) からい」は、「唐がらし」や「わさび」のように舌にピリピリとした強い刺激を与える「からさ」ではなく、強いて言えば、「幾分甘みのあるからさ」である。この種の「からい」の概念は、<舌にピリピリとした激しい刺激を与えず><舌に幾分甘みのある(大根) から味が強いさま>という意味特徴によって構成される多義的別義[9]である。

(87) 蒸し焼きのステーキにかけられた「西洋わさび (horse radish) ソース」はからい。における「西洋わさび」は日本や台湾ではあまり食されていないが、西洋では肉用の薬味、又は、医薬用に用いられており、身が白くて「からい」。この「(西洋わさび) からい」は唐がらしやわさびのように舌にピリピリとした強い刺激を与える「からさ」ではなく、むしろ「(大根) からい」のに似ている。「(西洋わさび) からい」が「(大根) からい」の「からさ」と異なる点は、香りがよくて風味があることであろう。この「(西洋わさび) からい」の概念を構成する意味特徴は、<舌にピリピリとした激しい刺激を与えず><香りがよくて><薬味・医薬用にも用いられて><感覚的に快い西洋わさびのから味が強いさま>である。この「からい」を多義的別義-[10]と分類する。

「からい」の表す味覚の概念には、以上の三つの意味系統以外にも、もう一つ別の意味系統が存在する。下記を見られたい。

(88) この地方の地酒はからい (から口だ)。

⁴⁸ F ウンゲラー/H.J.シュミット『認知言語学入門』、池上嘉彦ら訳、1998年、大修館書店、p.33。

⁴⁹ 山梨正明『認知言語学原理』、2000年、くろしお出版、p.196。

において、(88) 文中の「からい」の表す概念を支える意味構造を構成する意味特徴は、<舌を幾分刺激して><酷(コク)があつて><甘みの少ない酒味>である。これは「からい」の多義的別義-[11]と分類できよう。「酷がある」とは酒などが飲み手に深い味わいを感じさせる時に用いる表現法である。

次に、「からい」が味覚以外の領域に意味的に拡張して派生した新しい概念について考察する。

(89) 私のレポートに対するあの先生の評価はからい。

における「からい」が表す概念は味覚を表現する「からい」ではなくて、「厳しい」或いは「ひどい」という話し手の判断に係わる概念である。このように「からい」の概念が味覚の意味領域から、「厳しい」という味覚領域以外の「心理的な領域」・「評価・判断を伴う領域」などの領域に拡張した場合には共感的な比喩表現になる。この種の「からい」が表す「厳しい」という概念を構成する意味特徴は、<心身を強く刺激して><否定的な判断を伴った><感覚的に不快で好ましくないさま>である。この「からい」の概念は多義的別義-[12]と分類できよう。したがって、味覚以外の概念を表現する意味の系統に属する多義的別義類は、「からい」という実際の味覚を表現するのではなくて、心身に感じる刺激の強さの状態・さま・事柄などを表す。

(90) 相手のチームが二死満塁なので、ピッチャーはバッターに対してからい球を投げた。における「からい」の表す概念は、<正否の判定に苦しむようなきわどいさま>という意味特徴に支えられる「きわどい」の意味を表す多義的別義-[13]である。「きわどい」の表す概念は文語の「きわどし」の表す概念を受け継いでおり、「間に切迫している」「すれすれのところにあつて危ない」という意味を表現する。

(91) 選挙演説で、A候補者が対立しているB候補者に対して個人的な攻撃をした言葉は辛辣だった。

における「辛辣だ」の表す概念は、<聞き手が心身に激しい刺激を受けるような><話し手による批判・非難・抗議などを伴った><否定的な言動の非常に激しいさま>という意味特徴によって構成される「否定的な言動の激しいさま」である。この概念を多義的別義-[14]と分類する。

尚、通常、「言葉が辛辣だ」「態度が辛辣だ」とは表現するが、「言葉がからい」「態度がからい」とは表現しない。下記を見られたい。

(92) - a? あの人は言うことがからい。

(92) - b あの人は言うことが厳しい。

(93) - a ? 義母は私が何をしてあげても、私にからい。

(93) - b 義母は私が何をしてあげても、私に冷たい。

次に、「からい」の連用形である「からく」に副助詞の「も」が接続して副詞として変化した「からくも」の表す概念について考える。

(94) 高速道路で事故に遭って、運転していた車は大破したが私はからくも命を取り留めた。における「からくも」は、<命が左右されるほど心身を強く刺激して><感覚的に不快な好ましくない状態から><解放された心のさま>という意味特徴で構成される「やっとのことで」「かろうじて」という概念を表す。したがって、「からくも」は、「からい」の概念が意味的に拡張し、それに伴って生じた多義的別義— [11] の表す概念である「ひどく厳しいさま」を意味的に含意するものと推察できよう。しかし、「からくも」の表す「やっとのことで」「かろうじて」という概念は、「からい」の表す「ひどく厳しい状態さまから解放された結果の心的状態」について表現しているため、「からくも」は「からい」の多義的別義とみなさないで、「からい」の関連語と見なすのが妥当であると考えられる。

4. 2. 5 文語における「からし」の多義性に対する分析と考察

現代語における形容詞の「からい」は、文語において「からし」である。そこで、この項では、現代語における「からい」の表す概念が支配する意味領域の範疇に対して分析するために、文語の「からし」によって表される諸概念について分析し、それらが現代語の「からい」の表す概念とどのように関わりあっているかに対して分析・考察する。

「からし」の表す諸概念は、現代語における「からい」の多義的別義ではないが、「からい」が支配する意味領域の背景を成す要素として把握しておきたい。この項では、「からし」が「舌に激しい刺激を与える塩から味の強いさま」という味覚を表す「基本義」を踏まえて、共感覚的比喩表現から考察する。

(95) 滋賀の海人の 火気焼き立てて やく塩の からき恋を われはするかも⁵⁰
における「からき」は「からし」の連体形であり、「塩気または酸味のある塩から味の、甘くない切なくつらい恋」の意味として用いられていると解釈できよう。現代語の用法では、「からき恋」と表現するよりは、「切なくつらい恋」と表現する方が自然であろう。

(96) うらめしく我をば煮て、からき目を見するものかな。⁵¹

⁵⁰ 「万葉集」、十一巻、二七四二番の歌。

における「からき」は、前述の(95)文中の「からき」の意味とは異なって、「むごい、残酷だ、ひどい、厳しい」などの概念を表現している。これらの概念は現代語における「からい」の表す概念の中にも見出すことができる。

(97) 男女からく神仏をいのりてこの水門をわたりぬ。⁵²

における「からく」は「からし」の連用形で後に接続する「いのりて」を修飾しているが、その意味は「深刻に、真剣に」である。「からし」のこの意味用法については、現代語の「からい」の表す概念に引き継がれずに失われたものと考えられる。

(98) いみじきさまに おどろきをちて をる顔の いとからきにも心細さぞまさりける。⁵³

における「からき」は「からし」の連体形であり、その意味は「切である、甚だしい」である。この場合の「からき」の表す概念は、現代語では、「切実である」及び「甚だしい」によって表現することができる。

(99) 昔よりいひけることの唐国のからくもここに別れするかも⁵⁴

における「からく」は「からし」の連用形であり、その意味は「つらい、切ない、苦しい」などである。現代日本語の「からくも」の表す概念は「やつのことで」ではあるが、ある状況下における用法では、【苦しくても(或いは「つらくても」「切なくとも)】と【やつのことで】とを併記する表現が存在する。したがって、現代語を用いて表現する際に、「からくも」という一語のみを用いることによって、文語の「からし」の表す概念である「つらくても、切なくとも、苦しくても」などの概念を表す語は表面的に具現化されていなくても、言外にその意味を留めている振るまいが観察できる。

(100) 少将と藤侍従とはいとからしとおもひたり。⁵⁵

における「からし」は、「辛辣である」という意味を表現するが、現代語では、「少将と藤侍従の二人は、互いに大変手厳しい」と表現する方が自然であろう。

(101) からくや。眉はしもかはむしだちためり。⁵⁶

(102) からく急ぎて⁵⁷

においては、(101)(102)文における「からく」は、共に「からし」の連用形であるが、(101)文中の「からく」は、「嫌だ、気に染まない」の意味を表す。これに対して、(102)文中にお

⁵¹ 吉田兼好「徒然草」、六九段。

⁵² 紀貫之「土佐日記」、『日本古典文学全集一〇』、松村誠一校注 1989 年度版、小学館

⁵³ 紫式部「源氏物語一明石の巻」。

⁵⁴ 「万葉集」15 巻。

⁵⁵ 紫式部「源氏物語一常夏の巻」。

⁵⁶ 作者不詳「堤中納言物語」虫めづる姫君の巻。

⁵⁷ 紀貫之「土佐日記」。

ける「からく」は、「必死に、懸命に」という意味を表現している。現代語の「からい」はこれらの概念を受け継いでいないと見受けられる。

(103) からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。⁵⁸

における「からき」は「からし」の連体形で、「危ない」の意味を指す。ここでの「からき命まうけて」とは、「命が危なかったのを命びろいして」と解釈できよう。現代語の「からい」の表す概念には「危ない」という概念は含まれていない。しかし、「からくも」が「(危ないところを) やつとのこと」で」という概念を表すように、「危ない」の概念を含意した表現法が存在する。

4. 2. 6 「からい」の多義的別義の相互関連性に対する分析と考察

まず、現代語及び文語における「からい」「からくして」「からくも」の、それぞれの語が表す概念の間にどのような意味的な繋がりがあるかについて、【表 9】に示す。

【表 9】 現代語及び文語における語の表す概念上の相違

現代日本語	文語
【1】「からい」	【1】「からし」
A. 味覚	A. 味覚
(1) 塩からい (基本義)	(1) 塩からい (基本義)
(2) ピリ (唐がらし) からい (わさび) からい、(胡椒) からい (芥子) からい、(生姜) からい (らっきょう) からい (漬物)	
(3) 塩からくもピリからくもないからさ (大根) からい、(西洋わさび) からい	
(4) 酒味からい	
B. 共感覚的比喩表現	B. 共感覚的比喩表現
(1) (評価が) からい = 厳しい、ひどい	(1) からい = 甘くなく切なくつらい
しい	(2) からい = むごい、残酷だ、ひどい、厳しい

⁵⁸ 吉田兼好「徒然草」一五三段。

(2) からい=きわどい

(3) (言動が) 辛辣だ

= (批判・非難・抗議を 伴う言動・
行為の 激しく厳しいさま

(3) からい=深刻だ、真剣だ

(4) からい=切である、甚だしい

(5) からい=辛辣だ

(6) からい=嫌だ、気に染まない

(7) からい=危ない

【2】からくも

(1) やつとのこと

(2) かるうじて

【2】-a からく

(1) 必死に、懸命に

(2) かるうじて、やつと

【3】からくして

(1) もっと塩 (ピリ) からくして

(2) もっと評価をからくして

【3】からくして

(1) やつとのこと

(2) かるうじて

文語における「からし」の表す概念には数多くの共感的比喩表現を見出すことができる。「からし」の表示する多義性の方が「からい」の表示する多義性よりも複雑で多岐にわたっており、「からし」によって支配される意味領域は「からい」によって支配される意味領域よりも広範囲であったという知見を得る。また、「からし」の表す概念の内、「からい」によって受け継がれた概念は、「ひどい」「厳しい」である。「からい」の表す「激しい」という概念は、「からし」の表示する「酷い」「甚だしい」「辛辣だ」などの概念と同じ概念である。

次に、「からし」の表す概念の内、「からい」が受け継がなかった諸概念には、「甘くなくて、切なくつらい」「残酷だ」「深刻だ」「真剣だ」「切である」「つらい」「切ない」「苦しい」「嫌だ」「気に染まない」「危ない」などがある。この点に基づけば、現代語における「からい」が支配する意味領域は、文語における「からし」が支配する意味領域よりも大幅に狭くなったことが分かる。

また、文語における「からし」の連用形である「からく」は、「必死に」「懸命に」「かるうじて」「やつと」などの概念を表現するが、それらの概念の内、現代語の「からくも」は、「からし」の表示する「必死に」「懸命に」などの概念は受け継がなかったが、「やつと (やつとのこと)」「かるうじて」の諸概念は受け継いでいる。

これに対して、現代語の「からくして」と文語の「からくして」は完全に異なる概念を表現する。すなわち、前者は「もっと塩からくして」「もっとピリからくして」「もっと評価をから

くして」などという概念を表現するが、後者は「やっとのことで」「かろうじて」の概念を表現する。そして、「からい」の「基本義」及びそれぞれの多義的別義の間には、「基本義」の表す概念を支える<心身に与える刺激が強くて厳しいさま>という意味特徴が共有されていることが分かる。

以上、共感覚比喩が多義的別義の一種であるとの視点から、味覚形容詞「甘い」「からい」の多義性に対して分析した結果、それらの新しい別義を生じせしめる要素が、基本義とその新たに発生した意味との間に存在している意味的な関係と深い係わりがある点が明らかになった。この結論に至る過程として、「甘い」「からい」の基本義からそれぞれの多義的別義へと意味的に拡張・転用する変換プロセスを解明した。

5. 0 比喩表現の形成過程及び意味構造に係わる諸理論に対する考察

この章では、第一に、具現化された比喩表現がどんな種類の比喩表現に属するかを識別して分類する際に、比喩の形成過程及び意味構造並びにその具現化に係わる理論的背景などの視点からも分析する重要性を指摘し、分類の際に生ずる問題点を明確にすること、第二に、どのような理論に依拠して具現化された比喩表現の優劣を識別し判断することが可能であるかという識別方法について考察し、最も適した識別方法を選択すること、の二点について比較研究する。比較研究の対象としては、比喩表現の内、シミリ（直喩）、メタファー（隠喩）、シネクドキ（提喩）、メトニミー（換喩）に限定する。研究方法は、比較分析法及び認知意味論的分析法に加えて、比喩表現の優劣の識別方法に関する諸理論に依拠した帰納法によって分析・考察する。

また、本稿において用いる用語の内、「情緒・感覚的意味」とは、聞き手が対象に接した時に、引き起こされる感覚や感情に係わる連想的な意味であり、「カテゴリー的意味」とは、対象の分類に係わる人間の思惟作用のよって分類された辞書的な意味である、とそれぞれ定義する。その他の用語に関しては、必要に応じて本文において説明・解釈を試みる。

5. 1 メタファー（隠喩）に対する古典的な観点及び認知意味論的な観点の差異に関する考察と比較研究

5. 1. 1 古典的な隠喩観及び先行研究

どんな言語を修得する際にも修得者による比喩の修得の度合いがその言語の上達の速度と

理解度の深さとを測るバロメーターであることは衆知の事実である。⁵⁹ 比喩の構造は用いられる言語の文法的な規則の合致が不可欠である上、根底にはその言語を生み出した社会的・文化的な要素によって裏打ちされている。心身分離主義を前提としたデカルトの客観主義的・合理主義的哲学に基づいた古典的な「客観的で真理条件を満たすことを重視する意味論」による隠喩観では、比喩表現による字義通りの意味は常に「偽」であるため、命題の真理条件を問うことができない故に、比喩表現は字義通りの意味を歪めるとみなされていた。⁶⁰ 真理条件的意味論の枠内でメタファーを扱った理論には、「比較理論 (comparison theory)」がある。この理論は主題語と例える語の間の類似性に着目する。下記の文例を見られたい。

(104) あなたの肌は白雪だ。(隠喩文)

(105) あなたの肌はまるで白雪のようだ。(直喩文)

において、比較理論では、(104)文によって示されるように、「あなたの肌 (の白さ)」と「白雪」の二語の間の類似性を明示した表現に転換することによって真理価を問うことができるとみなして、メタファーの意味を解析したのである。D. ダヴィデソンは「直喩とメタファー (隠喩) とは、我々人間を外的世界の営み・現象を客観的に【比較】して理解するように目を向けさせるための、半永久的な修辭的技巧である」と主張した。⁶¹ これに対して、グライス説は「意味の字義通り説」を前提にして、会話の含意を重視した語用論的に基づいて、字義通りの意味を基に会話の原理を適用することによってメタファーも意味論的には形式論理に基づいて処理できるものであることを指摘した。⁶² J. サールはグライス説を更に拡張して、語用論的要素を強調して実際の運用面を重視する説を提唱した。⁶³ 語用論的要素の導入が強まる傾向に対して、没概念説を前提とした D. デイビッドソンは、意味とは、「概念理解」というより

⁵⁹ Lynne Cameron/ Graham Low "Metaphor" *Language Teaching*, Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, 1999, p.77 – p.96.

⁶⁰ Jerrold M. Sadock "Figurative Speech and Linguistics (修辭的表現と言語学)" in Andrew Ortony eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge, U.K.: University of Cambridge Press, 1990, p.46 – p.63.

⁶¹ D. Davidson "What Metaphors Mean," in M. Johnson ed., *Philosophical Perspectives on Metaphor*, Minneapolis: Minnesota University Press, p.220-227.

⁶² Paul Grice "Logic and Conversation (論理と会話)" in Peter Cole and Jerry L. Morgan ed. *Speech Acts, Syntax and Semantics Series Vol. 3*, New York: Academic Press, 1975.

⁶³ John R. Searle "Metaphor" in Andrew Ortony eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, 1990, p.92—p.123.

はむしろ「真理条件のみに基づいているべきだ」と主張して反対論を唱えている。⁶⁴ 一方、「緊張理論 (Tension Theory)」は主題語と例える語間の非類似性に着目して、それが比喩の斬新さや面白さを引き起こすと考える立場を取る。⁶⁵ 非類似性の源は「カテゴリー的意味」における不一致である。また、比喩を「選択制限違反」及び「語彙の結合規則違反」とみなす立場も含むものである。

関連して、I. A. リチャーズによる「相互作用理論 (Interaction Theory)」とは、「比較理論」及び「緊張理論」とを統合したものである。⁶⁶ そして、隠喩を含めた比喩的な表現とは、表面下に内在する話し手による「比喩的な思考の過程」を経た上で初めて具現化される点を指摘した。また、相互作用理論は、比喩表現には、主題語と例える語間の相互作用、及び、主題語と例える語間の非類似と類似の相互作用、の二つの側面がある点が提起された。更に、ブラックによる「Metaphor 論」が、リチャーズの相互作用論が提起した【比喩的な表現による創造性】に再び焦点を当てたが、新たな比喩を創造するメカニズムを解析するには至らなかったのである。⁶⁷

5. 1. 2 認知意味論による隠喩観について

5. 1. 2. 1 認知構造における隠喩の役割の重要性に対する考察

認知意味論では、比喩的な表現が人間の心の営みや認知能力と結びついている可能性があるとする問題意識を主張する。⁶⁸ 従って、認知 (人間の心の営み) 構造における隠喩の役割に対する解明が必要不可欠となる。Lakoff and Johnson はその著、『レトリックと人生 (*Metaphors We Live By*)』の中で、我々人間の日常生活のレベルにおいて用いられている表現の多くが、メタファーやメトニミーを含めた比喩的な表現であり、しかも、これらの表現は「概念メタファー」と呼ばれる基本的なベースが根底に存在していると指摘して、メタファー及びメトニミーに関する問題を、「言語」的な問題から「概念」の問題へと転換させたのである。⁶⁹ この主

⁶⁴ Donald Davidson “On the Very Idea of a Conceptual Scheme (概念的図式の本質)”, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association* 67, 1973 –1974, p.5 –p.20.

⁶⁵ P.E.Wheelwright, *Metaphor and Reality*, Bloomington, U. of Indiana Press, 1962.

⁶⁶ I.A.Richards, *The Philosophy of Rhetoric*, London, Oxford University Press, 『新修辞学理論』石橋幸太郎訳、南雲堂、1961。

⁶⁷ Max Black “Metaphor” *Proceedings of the Aristotelian Society n.s.55*, London: King’s College Press, 1954 –1955, p. 273 –p.294.

⁶⁸ George Lakoff and Mark Turner *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago: University of Chicago Press, 1989, p. 233.

⁶⁹ G. レイコフ・M.ジョンソン『レトリックと人生 (1999年増補版) (*Rhetoric We Live By*)』、渡辺昇一訳、大

張は、客観的古典的な意味論に対して、「主観的意味論」を提唱したことになる。言い換えれば、古典的な客観的意味論では、「言語の意味とは、話し手が客観的に外界を描写している事柄である」が、これに対して、Lakoff and Johnson による認知意味論では、話し手が外界を身体的な経験によって認知した事柄を、自身で概念化したものを「記号化」したものであるとみなす。そして、それぞれの人間が持つ思考体系を構成している「概念メタファー」が、話し手個人の経験に基づいている点を指摘した。⁷⁰ Lakoff and Johnson 説は、人間の概念体系を (a) 字義通りの概念と、(b) 比喩的な概念、の二種類に分類して捉えている。その差異に関しては以下を見られたい。⁷¹

(I) 字義通りの概念 (経験から直接派生する概念)

- (a) 空間的位置関係 (例: 上下、内外、前後)
- (b) 存在的位置関係 (例: 対象、容器、人物)
- (c) 経験と活動 (例: 食事、運動、移動)

(II) 比喩的な概念 (他の概念を通して理解され構造化される概念)

- (a) 方位的比喩 (例: 良いものは上→気分が高揚する)
- (b) 存在論的比喩 (例: 心は容器→心が満たされない)
- (c) 構造的比喩: 他の経験や活動で構造化する
(例: 人生は旅→私は岐路に立っている)

これらの「概念メタファー」の出発点になったのは、Reddy (1979)による「導管メタファー」という研究である。「導管メタファー」とは、パイプラインである「導管」の一方にいる話し手は、「言語表現」という「容器」のなかに「考え」を詰め込んで、「導管」のもう一方にいる聞き手に伝達しているメタファーを指しており、次の三つの概念が係わっている。⁷²

- (106) ーa 考えは物体である。(Ideas are objects.)
- ーb 言語表現は容器である。

修館書店、p.88—p.225。

⁷⁰ G. レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.3—p.7。

⁷¹ 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、2000年、増補版、p.10。

⁷² Michael Reddy, "Conduit Metaphor" in N. Warren, ed., *Metaphor and Thought*. Cambridge, England: Cambridge University Press, 1979.

—c 伝達 (コミュニケーション) は送ることである。

次に、「導管メタファー」の例を下記に示す。⁷³

(107) あなたの気持ちは私の方にはっきり伝わらなかった。

5. 1. 2. 2 概念メタファーに対する分析と考察

Lakoff and Johnson では、概念メタファーとしては、前述の「導管メタファー」に加えて、(a) 構造のメタファー、(b) 方向性のメタファー、(c) 存在のメタファー、の3種類のメタファーがある。

(108) 時は金なり。(Time is money.)⁷⁴

を構造のメタファーとするならば、下記の文例はそれをベースに産出されたメタファー表現である。

(109) 彼女に多くの時間を投資した。

また、下記の諸文例は「議論は戦争である」という構造メタファーを根底に持っていて、文中の「議論」をいずれも「戦争」に係わる表現として捉えたものである。

(110) 議論は戦争である。(Argument is war.)⁷⁵

(111) あなたの主張は守りようがない。

(112) 彼は私の議論の弱点をすべて攻撃した。

関連して、下記の(113)文は、(114)文によって表される構造メタファーを根底に産出されたメタファー表現の例である。

(113) 恋愛は旅である。(Love is a journey.)

(114) 長い道程をやって来た。(Look how far we' ve come.)

において、「恋愛」を「旅」で把握する概念メタファーが根底にある。「恋愛」と「旅」に共通している意味構造は、「旅」には「出発点」と「目的地」があり、「旅」とは、その「目的地」に向かって道のりを進むことである。この説によると、我々人間は「旅」の構造を通して「恋愛」の一側面を理解するものと考えられる。また、ある概念を理解するための複数のメタファーから、ある一つのメタファーを選択して用いると、そのメタファーによる一側面の概念を「焦点化」させる。そして、選択されなかったメタファーは「背景化」されるため、具現化するプ

⁷³ G.レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.13-p.15。

⁷⁴ G.レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.9。

⁷⁵ G.レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.4。

ロセスにおいて複数のメタファーが衝突されることはないものと考えられている。⁷⁶

5. 1. 2. 3 方向性のメタファーに対する分析と考察

方向性のメタファーとは、空間的な経験を「上-下」・「前-後」・「内-外」・「着-離」・「深-浅」・「中心-周辺」などの位置関係として概念化したものである。空間的な経験とは、例えば、感情、支配力、善悪の判断、心理状態などを指す。方向性のメタファーを各カテゴリー別に分けて比較・考察する。⁷⁷ 各文例に付記された記号の内、(a)は【脚注 77】に表示したレイコフによる英文の文例を筆者が日本語訳したものを、(b)は【脚注 78】に表示した谷口による文例を、(c)は筆者の作例を、それぞれ表示する。

A. 【楽しきは上、悲しきは下】のカテゴリー：

(115) 有頂天になる。(b)

(116) 天にも上る気持ちだ。(b)

(117) 気を落とす。(c)

しかし、このカテゴリーに属する日本語のメタファー表現には、「上」を用いても必ずしも「楽しきは上」という概念を表してはいないものもある。下記を見られたい。

(118) 彼は舞台であがって、セリフが上調子だ。(c)

(119) 彼は面接の時緊張して、応答が上ずっていた。(c)

B. 【意識は上、無意識は下】のカテゴリー：

(120) 眠りに落ちた。(a)

(121) 意識不明の状態に陥った。(c)

C. 【健康と生命は上、病気と死は下】のカテゴリー：

(122) 健康状態はすこぶる上々だ。(a)

(123) あの先生は肺癌で倒れた。(c)

(124) あの人の健康状態は下落している。(a)

D. 【支配力や力があることは上、支配されたり力に服従することは下】のカテゴリー：

(125) 彼の権勢は上向きだ。(c)

(126) 彼女の方が私よりも上手(うわて)だ。(c)

(127) 私は校長の支配下にある。(c)

⁷⁶ 谷口美 『認知意味論の新展開』 研究社、2003年、p.20-p.35。

⁷⁷ G. レイコフ・M. ジョンソン 『前掲書』、p.18-p.26。

(128) あの役者は下積み生活が長い。(c)

(129) 彼の権勢は下り坂だ。(a)

また、下記の(130)文中は「政治的な支配者は上、被支配者は下」の概念を表した「下克上」という日本語表現を含んだ例であり、(131)文、(132)文は「全国を政治的に支配する首都(都)を上、それ以外の地方を下」と見る日本文化特有の見方に依拠した表現である。

(130) 斎藤道三は下克上で美濃の城主になった。(c)

(131) 彼女はおのぼりさんだ。(b)

(132) 彼は、東京の本社から九州の支社へ都落ちした。(c)

E. 【より多きは上、より少なきは下】のカテゴリー：

(133) 「産めよ、増やせよ」は当時のよき国策だった。(c)

(134) 私の収入は昨年上昇した。(a)

(135) この州の芸術活動の活発度は昨年以下落した。(a)

F. 【予知できる未来のことは上(かつ前方)】のカテゴリー：

(136) 今週はどんな出来事が持ち上がるのか。(a)

(137) その問題を今日の会議の議題に上げよう。(c)

G. 【高い位は上、低い位は下】のカテゴリー：

(138) あの人は会社で成功への梯子を上っている。(c)

(139) 彼女は宮仕えの位では、最高位まで昇った。(c)

(140) ホームレスは社会の底辺にいる。(c)

H. 【よいことは上、悪いことは下】のカテゴリー：

(141) 景気は上向きだ。(a)

(142) 景気は史上最低だ。(a)

I. 【徳行は上、悪行は下】のカテゴリー：

(143) あの先生は高潔である。(a)

(144) 玄関に季節の生け花を置けば、家庭の品格が上る。(c)

(145) 私は身を落としてまで、詐欺などしたくない。(c)

J. 【理性的であることは上、感情的であることは下】のカテゴリー：

(146) 議論は感情的レベルにまで落ちてしまったが、理性的な所まで引き上げて戻した。(a)

(147) 故郷に戻ると、懐かしさが湧き上がってくる。(c)

において、(146)文は「感情的であることは上」という概念を表現したメタファーであると考
えられる。

以上考察の結果、「方向付けのメタファー」の内、ある概念カテゴリーに属する日本語独特
の表現については、英語圏の社会的・文化的な価値観とは異なる日本の社会的・文化的な要
素に依拠した見方・考え方・価値観に基づいている故、Lakoff and Johnson 説には必ずし
も完全に合致しない点も存在することが明らかになった。

5. 1. 2. 4 存在のメタファーに対する分析と考察

認知意味論では、「方向付けのメタファー」の弱点を補う理論的な背景として、「存在のメ
タファー」が提起された。⁷⁸ 我々人間は具体的な物体や内容物という観点から自身の経験を理解
することができる。そして、「出来事や活動、感情や考え」を「存在物や内容物」として数量
化するわけである。そうすることによって、我々の経験の実体を類推することが可能となる。

(148) インフレは一つの存在物である。(a)

において、我々は経験によってインフレの負の影響力を認識している。インフレを数量化し、
インフレの特定の側面を識別して、インフレを一つの原因であると見なすと、対応策を立てる
ことができるのである。

関連して、「存在のメタファー」を構成するメタファーには、出来事や行為を「物体メタ
ファー」として表現するもの、活動を「内容物のメタファー」として表現するもの、に加えて、
状態を「容器のメタファー」として表現するものがある。また、物理的物体が人間としての特
徴をもった「擬人化されたメタファー」は、人間以外の存在物に関する広い領域に及ぶ我々の
経験に対して、人間の動機や性格、活動を通して我々が理解することを助けてくれる。⁷⁹

(149) 彼は今視界の外にいる。(=もう彼は見えない。) 【「視界」を「容器」として捉
えたメタファー】

5. 1. 3 プライマリー・メタファー及び複合的メタファーに対する考察

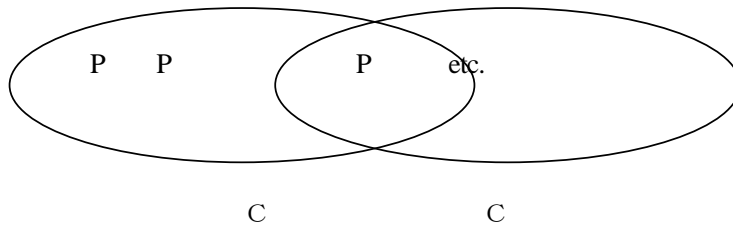
認知意味論では、隠喩の構造については、「プライマリー・メタファー」とそれによって構
成される「複合的メタファー」の存在、及び、これら二種類のメタファー間の相互関係とが指

⁷⁸ G.レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.37-p.49を参考。

⁷⁹ G.レイコフ・M.ジョンソン『前掲書』、p.46-p.50。

摘されている。⁸⁰ その相互関係を【図 6】として示す。⁸¹

【図 6】 プライマリー・メタファーと複合的なメタファーの相互関係図



注： Pはプライマリー・メタファー、Cは複合メタファーを表す。

プライマリー・メタファーとは、独立した直接的な経験基盤を持ち、それによって言語的データを予測することができるものと定義される。一方、複合的なメタファーとは、複数のプライマリー・メタファーから合成された複合的なメタファーであると言えよう。また、グラディ説による直接的な経験基盤とは、我々人間が経験する運動感覚的な経験と主観的な経験及び判断がなされる状況を指す。

(150) 親密さとは近さである。(運動感覚的領域：身体的距離→主観的経験：親密さ)

(151) 理解することは把握することである。(運動感覚的領域：物体の操作→主観的
判断：主題的理解)

(152) 愛情は温かさである。(運動感覚的領域：温度→主観的判断：愛情)

(153) カテゴリーは容器である。(運動感覚的領域：空間→主観的判断：種類の知覚)

(153) 量が多いことは上である。(運動感覚的領域：垂直の方向性→主観的判断：量)

において、プライマリー・メタファーは直接的な身体的経験に基づいており、認知プロセスの過程では、我々人間によって第一義的に経験されるものであることが分かる。また、

(154) Theories are buildings. (理論は建築物である。)

という構造のメタファーについては、Graddy は実際には下記のような二つのプライマリー・メタファーから構成される複合的なメタファーだと解釈している。

(155) — a Organization is physical structure. (組織は物理的構造である。)

⁸⁰ Joe Grady *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*, Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley, 1997.

⁸¹ J. Grady, S. Taub, P. Morgan "Primitive and Compound Metaphors" *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. By A.E. Goldberg, Stanford, 1996, p.182.

—b Theories are organizations. (理論は組織である。)

5. 2 直喩・隠喩・換喩・提喩を支える意味構造の差異に対する分析と考察

5. 2. 1 直喩・メタファー (隠喩) を支える意味構造の差異に対する分析と考察

修辞学の分野では古代ギリシャ時代からメタファーが研究の中心で、シミリ (直喩) とメタファーとの差異に関しては、「直喩はメタファーの中に含まれるものであり、両者の区別はない」と見なす説さえある。⁸² 認知言語学的な観点も、従来から存在しているメタファー重視説と比較して大きい差は見られない。

『広辞苑』によれば、直喩とは、「修辞法の一。直接あらわに二つの事物を比較すること。例えるものと、例えられるものとを、「たとえば」「あたかも」「さながら」「如し」「似たり」などの語を用いて示す方法で、比喩表現中、最も理解しやすいもの」と定義される。⁸³ 直喩の結合表現には、これらの「説明語」の外にも、「その外に『…のような』『…に似た』などの類似的設定の言葉づかい、または、『…めいた』『…風の』という質的な意味を示す言葉、更に、『…ほど』『…くらい』のような量的な表示、『…顔負けの』という、質量両方にまたがる結合表現もある」とする陳伯陶説による『広辞苑』の定義への補足的な指摘もある。⁸⁴ 本稿は、直喩と隠喩とが同一ではないという観点に立つ。その理由は、直喩によって結合表現された二項と、隠喩によって結合表現された二項とが示す意味的な関係が常に等価であるとは限らないからである。下記を見られたい。

(156) あなたは私の太陽だ。

(157) あなたはまるで私の太陽のようだ。

においては、(156)文中の「太陽」の意味は「生きていく上で最も重要で不可欠なもの」を意味しており、意味的には「私の太陽だ」という述語の項が前景化されて「あなた」が「私の太陽だ」に融合 (一元化) されてしまっている。これに対して、(157)文中の「太陽」はそれほど強い意味を表現しているとは考えられず、「あなた」と「私の太陽」とは各自別個の独立した表現として並置されていることが分かる。上記のような意味的な差異が存在する例は、直喩によって結合表現された二項と、メタファーによって結合表現された二項とが、常に等価で

⁸² Philip Wheelwright, *Metaphor and Reality*, Indiana University Press, 1962, A.Ortony(ed.) *Metaphor and Thought*, Cambridge University Press, 1979.

⁸³ 新村出『広辞苑』岩波書店、1996年、増補版、p.170、p.1461。

⁸⁴ 陳伯陶『日本語と修辞』台北・大新書局、1999年、増補版、p.155。

あるとは限らないことを示している。このような意味的な差異が見出されることは、直喩とメタファーとが形態的に異なるのみならず、意味的な構造も異なる可能性がある点を暗示していると思われるのである。

(158) 手術台の上で麻酔をかけられた患者のように、夕暮れが空に広がっている。

(T. S. エリオットの詩より引用)⁸⁵

(159) 夕暮れが手術台で麻酔をかけられている患者だ。

において、前者の(158)の直喩文においては、「夕暮れが空に広がっている」項と「手術台の上で麻酔をかけられたもの」項という別個の概念体系が、どちらか一方の項を前景化せずに、独立して並列的に表現されているという知見を得る。

これに対して、後者の(159)の隠喩文における「夕暮れ」と「麻酔をかけられたもの」とは、平等な意味論的、認知的、認識的なイメージ効果を有するものとして並列的に表現されてはならず、「麻酔をかけられているもの」の概念の方が前景化されている。すなわち、『夕暮れ』という観念と『患者』についての観念は一つに融合されており、『患者』側の強烈な観念体系が主語の『夕暮れ』をその中に完全に引きずり込んでいるのである。⁸⁶ このように、直喩は隠喩と違って、二つの観念体系が存在しながらお互いに干渉し合わず、互いにその観念体系を毀損し合うことなく並置されるのである。⁸⁷ 直喩とメタファーが共に「二項の間に存在する『類似性』に依拠した結合表現」である点において本質的な違いはないとは言えるものの、意味論的な構造面の視点から比較考察すれば、前述の差異が存在する点は明らかであると指摘できよう。

5. 2. 2 メタファーを支える意味構造とメトニミーを支える意味構造の差異に対する考察

隠喩文における二項の名称は、A と B の成す意味関係をどの視点から見るとによって異なる。例えば、

(160) 男は狼だ。

の場合は、以下に示すようにさまざまな呼び方がある。

⁸⁵ G.レイコフ・M.ターナー *More Than Cool Reason*, 大堀俊夫訳、『詩と認知』紀伊国屋書店、1989、p.67。E.F.Kittay *Metaphor*; Oxford: Clarendon Press, U.K. 1987, p.18. 原文は、【When the evening is spread out against the sky, Like a patient etherized upon a table;】出典は 'The Love Song of J.Alfred Prufrock(ジェイ・アルフレッド・ブルフロックの愛の賛歌)' の詩の冒頭文。日本語訳は筆者による。

⁸⁶ 土田知則「直喩はどこに消えたのか」『人文研究—第26』千葉大学、1998年、p.131。

⁸⁷ 利沢行夫『戦略としての隠喩——日常言語・小説にみる「ことば」のしくみ——』中教出版、1985年、p.217。

隠喩文における項の呼び方

	<u>A</u>	<u>B</u>
隠喩文	男は	狼だ。
	被喩辞 (例えられるもの)	喩辞 (例えるもの)
修辞学	主意 (tenor)	媒体 (vehicle)
認知意味論	目標領域 (target domain)	起点領域 (source domain)
類推モデル	ターゲット (target)	ベース (base)

関連して、長い間、メトニミーがメタファーの一種のように扱われてきたので、メトニミーの定義は未だ明確化されていない。しかし、Jacobson による「二元論的比喩論」は、ソシュールによる語の結合を表す「統辞」、及び、語の選択を表す「連合」の概念に「隣接性」と「類似性 (相似性)」を重ね合わせて、メタファーは類似関係 (連合関係) に、メトニミーは隣接性 (統辞関係) に、それぞれ作用する比喩であるという結論を引き出した。⁸⁸ 伝統的な定義によると、メトニミーとは、「あるものをそれに関係した別のものによって表す」比喩表現である。山梨説はこの定義と同じ立場に立って、メトニミーとは、「空間的な隣接性、近接性、共存性や時間的な前後関係、因果関係によって特徴づけられる比喩表現である」と定義する。⁸⁹ 佐藤説もメトニミーが近接・共存・相互依存などに作用する比喩であるという観点に立つ。⁹⁰ メトニミーの意味的な構造に係わる原理を「空間的・時間的な隣接性・近接性」に求めるのが今日の一般的な見解である。

また、Taylor 説は、メトニミーの本質として、第一に、概念構造内に共起する事物の関連をつける可能性に求めている点、第二に、メトニミーを指示の行為に限定する必要もない点、第三に、メタファーよりも基本的な過程とみなす点、などを指摘した。⁹¹ しかし、Taylor 説による第二の点に対して、反対の立場に立つ山梨説は、記号を「アイコン」「指標」「シンボル」に分類した C. パースの「三角形の枠組み」に基づいて、「メトニミーとは指標的な記号の機能をになう」と指摘する。⁹² この指摘に基づけば、メトニミーの本来的な機能は、「p と言いつつ q を指す」という指示 (対象の把握) である。筆者も同じ観点に立っていて、メトニミー

⁸⁸ R. ヤコブソン (R. Jakobson) 『一般言語学』みすず書房、1973 年、川本茂雄ら訳、p.210—p.222。

⁸⁹ 山梨正明『比喩と理解 [認知科学選書 17]』、東京大学出版会、1988 年、p.93。

⁹⁰ 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1978 年。

⁹¹ J. Taylor *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford: Clarendon Press, 1989 年、p.123—p.124。

⁹² 山梨正明『前掲書』、p.93。

とは、「対象把握」を指向する作用であり、メタファーは「内容把握」を指向する作用である
点に、メトニミーとメタファーとを分ける根本的な違いがあることを強調しておきたい。

＜縁故＞或いは＜関連性＞という概念を契機とするメトニミーの類型の主なものとして
は、[身体—感情]・[所有地—機関]・[作家—作品]などの意味関係に支えられている比喩表現
の外に、下記のタイプを挙げることが出来る。⁹³

- (261) 薬缶が煮えたぎっている。 (容器→中味)
- (162) 白バイに捕まる。 (手段→主体)
- (163) アルコールを飲む。 (原料→製品)
- (164) 筆をとる。 (手段→行為)
- (165) だらりの帯が前を歩いて行く。 (所有物→所有者)

5. 3 メトニミーを支える意味構造とシネクドキを支える意味構造の差異に対する考察

例えるものと例えられるものの二語の間に形成された意味関係が「部分—全体」を示す比喩
表現には、メトニミーとシネクドキ（提喩）とがある。この二つの比喩表現及び比喩構造に関
しては、本稿において既に前述したので、ここではメタファー及びメトニミー表現を支える意
味構造との差異について明確にするため、メトニミーとシネクドキ表現を支える意味構造の差
異について、再度、簡単に要点のみを述べるにとどめる。

メトニミーとシネクドキという二種類の比喩表現は混同されることが多い上に、二者の間
には明確な区別をつけにくいという難点がある。Lakoff and Johnson 説は、「シネクドキは『死
んだ隠喩表現』である」とみなす。その他の説によっても、シネクドキはメトニミーの一種で
あるという観点の立場に立つものが多い。これに対して、グループ II（ミュー）はシネクド
キを「全体—部分」の関係にある II 様式と、「類—種」の関係にある Σ 様式に分けて、シネ
クドキこそが他の全ての比喩に関する表現の根底を成すものであるとの観点に立つ。⁹⁴ 一
方、佐藤説は、辞書的な分類を基にした観念的な概念を表示する「カテゴリー的な意味関係」に
基づいた「類—種」「全体—部分」の関係にある二語が形成した比喩を「シネクドキ」とみな
して、それ以外の「具体的で実際的な物体」の「全体—部分」の意味関係に基づいた比喩はメ
トニミーであると定義した。

グループ II 説による II 様式のシネクドキ（提喩）とは、例えば、「帆」で「船」を表すシネ

⁹³ 田中茂範「認知意味論的探求 (3) 意味空間における焦点化としての換喩」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要—
第 26 号』、1994 年、p.183—p.209。

⁹⁴ グループ II 『一般修辞学』大修館書店、1996 年、増補版、p. 199—p. 207。

クドキを指し、 Σ 様式のものとは、例えば、「花」で「桜」を表すシネクドキを指す。シネクドキによる比喩表現には〈部分—全体〉或いは〈種—類〉という意味関係が、その比喩に属すると見なされる識別法用の基準が用いられていることが見出される。問題点は、〈部分—全体〉の関係を表す比喩表現はメトニミーにもあるので、この意味関係を表すシネクドキとメトニミーは明確には区別するのが困難な場合が多い。佐藤説は上記のグループ u 説に同意しない立場を取る。すなわち、〈種—類〉の意味関係を表示する比喩はメトニミーに還元できないシネクドキだが、〈部分—全体〉の関係を表す比喩はメトニミーの一形態であると見なす。⁹⁵ 楠見説も佐藤説に同意する。そして、メトニミーを「場面の空間的、時間的隣接関係に基づく比喩」と見なして、シネクドキを、〈上位—下位〉の階層性を示しているのに加えて、「カテゴリー的知識」に支えられている比喩表現であるとする。本稿はこの項において分析・考察した結果、佐藤説・楠見説に同意する立場を取ることを明記しておきたい。

6. 0 比喩表現の良否に対する識別法に関する考察

ある具現化された比喩の良否を判断する際には、第一に、その比喩表現を構成している二つの構成語の間に存在する「類似性・近接性」を「認知」することである。次に、それら二つの構成語が形成する「意味関係」の「意味構造」を明らかにしなければならない。

意味構造を明らかにする時には、知識表現の仕方が異なる、(1) 集合論モデル、(2) 空間モデル、(3) 命題（ネットワーク）モデル、の三つのモデルを用いて解析する方法がある。そして、比喩表現の良否を識別する際に用いる主な三つの理論による識別法と組み合わせると、(1) 特徴集合論と集合論モデル、(2) 領域相互作用理論と空間モデル、(3) 構造写像理論と命題モデル、などの組み合わせが考えられる。

6. 1 集合論モデルを用いた識別法に対する考察

類似性認知を集合論モデルに基づいて形式化したのが Taversky 説による「コントラスト・モデル」である。これは「例えるもの = b」と「例えられるもの = a」のそれぞれの特徴集合を対応させて、a と b の間に存在する類似性が如何に異なるかを説明する。例えば、二つの対象 a、b の特徴集合を A、B とした時、対象 a の b に対する類似性を $s(a, b)$ 、A と B の共有特徴集合を $(A \cap B)$ 、A の B に対する示差特徴集合を $(A - B)$ 、B の A に対する示差特徴

⁹⁵ 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1978年、p.150—p.152。

集合を (B-A) として、それらの測度の線形結合で表現すると、

$$s(a, b) = \theta f(A \cap B) - \alpha f(A - B) - \beta f(B - A)$$

となる。この結合式に基づくと、 $f(X)$ は特徴集合 X の顕著性を反映する測度となる。そして、類似性の非対称性、すなわち、対象 a の b に対する類似性と対称 b の a に対する類似性が異なること ($s(a, b) \neq s(b, a)$) は、 $\alpha > \beta$ によって説明できる。⁹⁶ このコントラスト・モデルは Ortony 説によって下記のように修正された。⁹⁷

$$s(a, b) = \theta f_B(A \cap B) - \alpha f_A(A - B) - \beta f_B(B - A)$$

において、 f_A 、 f_B は、特徴集合 A 、 B それぞれに依拠する顕著性の測度を示す。共有特徴集合である ($A \cap B$) の顕著性が、 B における顕著性に依拠する点を見出すことができる。例えば、

(166) 心は湖のようだ。

における比喩を形成する項は、“心” (A) と“湖” (B) であり、それら二語の間に存在する共有特徴 ($A \cap B$) = {深い、清い、静寂だ、……} は、“心” (A) においてはあまり顕著であるとは言えないが、“湖” (B) においては非常に顕著な特徴であることが見出される。この測度の差に基づいた観測では、例えば、「“心”を語る時、“湖”を重ね合わせることによって、“心”における {深い、清い、静寂だ、……} といった複数の特徴を同時に顕在化することになる。その結果、比喩主題の意味が変化する。これは、 A と B の示すそれぞれの特徴の集合である「共有特徴」における顕著性の落差が「 B において高く、 A において低い」事実を指摘している。

(167) 心は沼のようだ。【楠見による文例】

(168) 沼は心のようだ。

において、(167) 文の表す類似性と、その反転文である (168) 文の示す類似性とを比較すれば、前者における類似性の方が高い。それは、 A の特徴集合と B の特徴集合の和による共有特徴集合が依拠する顕著性が、前者は後者に比べて高いことに基づいているからである。⁹⁸

6. 2 空間モデルを用いた識別法に対する考察

類推及び比喩の処理プロセスは、知能の重要な構成要素である帰納推理の内の一プロセスである。Tourangeau and Sternberg 説は、既に前述した Black による「相互作用理論」を更に

⁹⁶ A.Taversky 'features of similarity,' *Psychological Review* 84, 1977, p.327—p.352.

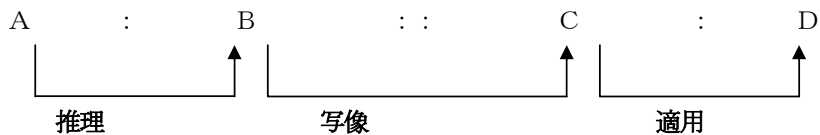
⁹⁷ A.Ortony 'Beyond Literal Similarity,' *Psychological Review* 86, 1979, p.161—p.280.

⁹⁸ 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』風間書房、1996年、p.31。

発展させて、「領域相互作用理論」を提唱した。そして、この領域相互作用理論に基づいて「空間モデル」による識別法を提起した。空間モデルに基づけば、比喩とは、単に構成語が対応するのみならず、4項類推 (A : B :: C : D) においては、構成語 (A、B) と (C、D) のそれぞれの項が属している二領域間に対応があると捉えることが可能である。例えば、【A (医者) : B (患者) :: C (教師) : D (?)] という4項類推においては、D項に最も適する概念を発見するのが課題であるが、上記の4項類推は、下記のような構文の持つ意味構造と同じであることが見出される。

(169) 医者 (A) と患者 (B) の関係は、教師 (C) と「生徒 (D)」の関係に等しい。において、コンポネント・アプローチを用いれば、D項に当てはまる最も適格な概念を探することができる。

【図 5】 4項類推のコンポネントを明らかにするコンポネント・アプローチ



このアプローチによって、D項を推定するプロセスは、次のように4プロセスとして説明することができる。⁹⁹ 第一に、A、B、C、Dの各項を符号化する。第二に、AとB間の関係を推理 (A→B) する。第三に、AとB間の関係をCに写像する。最後に、推理された関係をCとDに適用 (C→D) する。このようなプロセスによって最も適格なD項を推定することは「良い比喩表現の生成」に繋がるのである。すなわち、比喩を構成する二語の意味は、カテゴリ的意味を表す大局空間と、各カテゴリ内の成員を表す局所空間とを用いた、「二重の意味空間」によって表現することができるわけである。この意味は、比喩表現における類似性を、大局空間と局所空間における二つの距離として捉えることに外ならない。そして、構成語間の相互作用による構成語の意味変化は、意味空間上の布置の変化として捉えることができるものと考えられる。しかし、意味特徴の顕著性を定量化することがかなり困難である故、実証的検討に関する報告例は少ない。ともあれ、その二構成語間の距離が遠ければ遠いほど類似性が低くなり、比喩表現は斬新で意表をついたものとして聞き手に受け止められる結果になると考

⁹⁹ 楠見孝『前掲書』、p.32。

えられる。

以上の考察の結果をまとめると、比喩は下記のように大きく二つに大別することできよう。

1. 特徴隠喩：対象間に共通する特徴がある。そして、このカテゴリーに属する比喩表現は、前章において考察した「特徴集合モデル」によって説明が可能なタイプである。

2. 関係比喩と構造比喩：共通する特徴間にある種の関係や構造がある。そして、このカテゴリーに属する比喩表現を成立させるプロセスは「類推」とも呼ばれ、比喩表現を支える意味構造は「空間モデル」によって説明可能である比喩のタイプである。

6. 3 命題モデルを用いた識別法に対する考察

Gentner and Clement は認知意味論に基づいて、メタファー、類推、字義通りの類似性を基底領域（例える領域＝）と目標領域（例えられる領域＝）間で共有する属性と関係の程度を測定して分類した。その結果、第一に、メタファーは属性だけを共有する【表面的な類似性】を示す表現から、関係だけを共有する【類推】までの広い範囲を包括していること、第二に、属性の共有の程度が高くて、しかも関係共有も程度の高いものが、【字義通りの類似】である、という結論を導き出した。¹⁰⁰ そして、例える基底領域から例えられる目標領域へ写像されやすいのは、【システム性の原理】によって、属性よりも高次の関係が存在するからである。また、例える領域である既知の基底領域から例えられる領域である未知の目標領域への写像は、命題の形で記述することができる。この命題モデルは、特徴モデルや空間モデルでは表現できない「関係隠喩」や「隠喩」のような比喩が示す意味関係を表現する時や、その良否を識別する時に有効である。

(170) 微笑はさざ波のようだ。

(171) 眼は湖のようだ

において、例えられる語である「微笑」と例える語である「さざ波」間の「意味的距離」を【パス解析】を用いて検討する。その結果、【カテゴリー的意味】においては「微笑」と「さざ波」の両概念はかけ離れていることが、【情緒・感覚的意味】においては、両概念は共に＜美しい＞ことにおいて[評価]が高く、＜動く＞において[活動性]も高い。結果として、「微笑」によって表示される概念と「さざ波」によって表示される概念は非常に接近していること、また、(69)文における「眼」と「湖」においても、両概念は接近していた、との結論が提出されてい

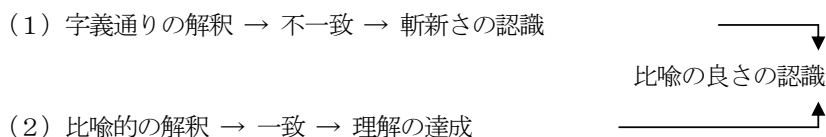
¹⁰⁰ R. Tourangeau and R. Sternberg “Understanding and appreciating metaphors” *Cognition II*, 1982, p. 203-p. 244.

る。¹⁰¹

6. 4 パス解析による比喩の良否の識別法について

パス解析とは、ある比喩表現の良否を識別する際に用いられる方法の一つで、読み手・聞き手が比喩を理解する時に「カテゴリー的意味」と「情緒・感覚的意味」というそれぞれの領域における反応を測定しながら、段階ごとの測定値を図の上に布置して記述しつつ「パスモデル」を作成し、その結果を解析する方法である。パス解析には比喩の理解プロセスが根底にあるので、それを次に示す。

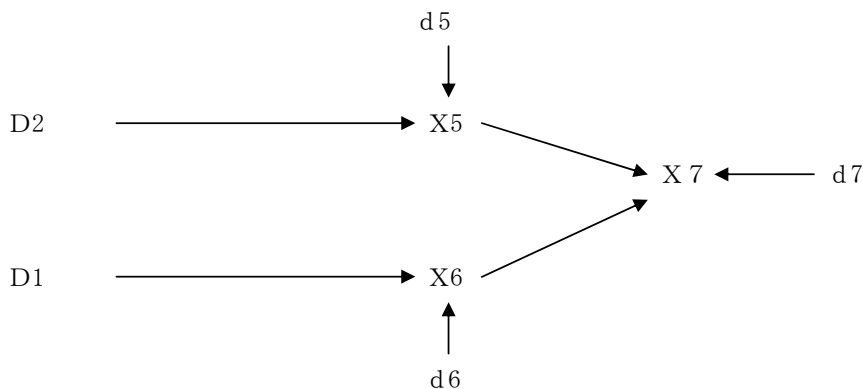
【図 6】 比喩の理解プロセス



パス解析方法を用いると、比喩を形成する主題語と例える語の間に存在する（１）「類似性が高いか低いかな」及び（２）「意味的な距離は遠いか近いかな」などということ測定することが可能となる。このプロセスに基づいて主題語（a）とたとえる語（b）に対する比喩の良さを規定するパス・ダイアグラムの二例を下記に示す。

【図 7】—A 比喩の良さを規定するパス・ダイアグラムの例

【Three-level Model の場合の一例】

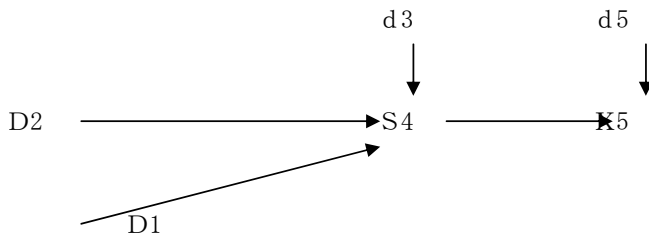


注：上の図における d5、d6、d7 はそれぞれ異なる攪乱項を示す。

¹⁰¹ 楠見孝「前掲書」、p.44—45。

【図 7】—B 比喩の良さを規定するパス・ダイアグラムの例

【Four-level Model の場合の一例】



注1：上の図における(S4)は単語間類似性を表す。

注2：【図 7】で用いられているそれぞれの記号：(S3)＝文内類似性、(S4)＝単語間類似性、(d3、d5、d7)＝攪乱項、(X5)＝比喩の理解容易性、(X6)＝比喩の面白さ、(X7)＝比喩の良さ、(a)＝主題語、(b)＝たとえる語、(D1)＝「主題—たとえる語」間のカテゴリ的距離、(D2)＝情緒・感覚的距離、などである。

パスモデルを作成する場合に、「カテゴリ的意味」を支える意味構造と「情緒・感覚的意味」を支える意味構造という、二重の意味構造を想定して、比喩表現における(1)「類似性が高いか低いか」及び(2)「意味的な距離は遠いか近いか」などを測定した測定値をパス・ダイアグラムに布置して解析する。本稿ではパス・ダイアグラムによってそれぞれの認知・理解の段階の流れを明確に示すために、測定値を表示せずにモデル図のみを示した。比喩の良さが増加する振る舞いが見出される場合は、(1)主題語である例えられる語と例え語の間のカテゴリ的距離が大きい場合、(2)例えられる語と例え語の間的情緒・感覚的距離が小さくて、類似性の高さが増加する場合、である。この外、比喩の類似性判断に関しては、単語間の類似性はカテゴリ的距離と情緒・感覚的距離の両方の影響を受ける。また、比喩を構成する二語間の文内類似性判断については、カテゴリ的距離は無視されて情緒・感覚的距離だけで判断される。¹⁰²

以上の分析・考察の結果、相互作用理論に基づく空間モデルが最も高い適合度を示すので、比喩の良さを識別する際にも適していると考えられるという私見を述べておく。

本章では、具現化された比喩表現が、直喩、メタファー、メトニミー、シネクドキシの内のど

¹⁰² 楠見孝『前掲書』、p.53—p.56。

の比喩表現に属するかを識別する際には、【どのような意味的な側面】及び【どのような類似性・隣接性】に依拠して判断すべきかの重要性を指摘して、その「類似性・隣接性」の境界の不明確な点が識別する際の問題点であることを指摘した。境界が不明確であるという意味は、「類似性」と「隣接性」が連続している可能性がある点を示唆しているものと考えられる。また、具現化された比喩表現の優劣に対する識別に際しては、特徴集合モデル、相互作用理論に基づく空間モデル、命題モデルなどのモデルを用いた楠見説による検討方法及びその結果を分析・考察した結果、空間モデルが最も適していると考えられる。また、比喩の優劣を識別する際には比喩表現によるイメージの浮かびやすさや親近性などの効果も考慮すべき点が重要である点を指摘したいが、その測定法に関しては現段階では未だ確定されてはいない。パス解析による比喩の良否に対する識別法は、比喩表現に数多くの多義性が存在す場合には全ての多義性を正確に測定し査定できるかについて多少疑問があり、今後、更により多くの事例について考察しなければならない必要があるものと考えられる。

7.0 今後の課題

今後の課題としては、可能であれば、同じ意味を表現する際に用いられる比喩表現で、中国語による比喩表現と日本語による比喩表現によって形成される一組の比喩表現を具体例として提示して、その一組の中国語による比喩表現と日本語による比喩表現の間に存在するところの、(1) 表現上の差異、(2) それぞれの比喩表現を支える意味構造上の差異、(3) それらの相違点が中国文化と日本文化の相違点によって影響を受けているや否や、などの諸点に対して、比較研究する必要がある。そのためには、中国語母語話者、及び、日本語母語話者、の双方に対して「アンケート調査」を実施して、その結果を詳細に分析して、結果を明確にした場合には、更に、比喩の優劣に対して判断する必要がある点を、今後の課題として提起しておく。

8.0 総括結論

本論文は、多種類にわたる比喩表現、及び、それらの比喩表現を支える意味構造の差異に対して主に認知意味論に基づいて分析・考察して、それぞれのシネクドキ、メトニミー、メタファー、共感覚比喩などの表現上の差異、並びに、それらの異なる比喩表現を支える意味構造の差異、などを明確に指摘した。また、比喩の優劣を判断する諸理論に基づいて、比喩の優劣の判断方法を示した。

以上である。

【注】

- 注¹ R. ヤコーブソン『一般言語学』1973年、川本茂雄ら訳、みすず書房、p. 210、p. 221—p. 222。
- 注² G. レイコフ・M. ジョンソン『レトリックと人生』1999年（増補版）、池上嘉彦ら訳、紀伊国屋書店、p. 91—p. 108。
- 注³ David Cooper *Metaphor: Aristotelian Society Vol. 5*, 1986, Basil Blackwell, Oxford, Great Britain, p. 118—p. 127.
- 注⁴ 中村明『比喩表現の理論と分類』1952年、国立国語研究所、p. 33。
- 注⁵ 瀬戸賢一『認識のレトリック』海鳴社、1997年、p. 194—p. 201。
- 注⁶ 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』1995年、風間書房、p. 170—p. 206。
- 注⁷ 楠見孝『前掲書』、p. 186。
- 注⁸ グループII『一般修辞学』1996年、大修館書店、p. 195。
- 注⁹ グループμ『前掲書』、p. 244。
- 注¹⁰ 佐藤信夫『レトリック感覚』1978年、講談社学術文庫、p. 183—p. 192。
- 注¹¹ 佐藤信夫『前掲書』、p. 179—p. 188。
- 注¹² 芝原宏治『錯誤の意味論』1995年、海鳴社、p. 110—p. 115。
- 注¹³ 初山洋介「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学 80』、1997年、名古屋大学国語国文学会、p. 31。
- 注¹⁴ 瀬戸賢一「意味のレトリック」、巻下・瀬戸編「文化と発想とレトリック」、1997年、研究社、p. 123。
- 注¹⁵ 山梨正明『認知文法論』1995年、ひつじ書房、p. 95—p. 96。
- 注¹⁶ Mark Johnson *The Body in Mind—The bodily basis of Meaning, Imagination, and Reason*, 1987, Chicago University Press, p. 21.
- 注¹⁷ Mark Johnson *Ibid.*, 1987、p. 25—p. 28.
- 注¹⁸ D. Rumelhardt “Notes on a Schema for Stories” 1989, A. M. Collins, eds. *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*, New York Academic Press, p. 211—p. 236.
- 注¹⁹ G. レイコフ『認知意味論』1999年（増補版）紀伊国屋書店、p. 331—p. 355。
- 注²⁰ G. レイコフ『前掲書』1999年、p. 360—p. 365。

- 注 21 Haruko Cook “Schematic Values of the Japanese Nominal Particles WA and GA in R. A. Geiger & B. Rudka —Ostyn eds., *Topics in Cognitive Linguistics*, 1993, p. 371—p. 397.
- 注 22 J. I. Saeed *Semantics* Cambridge, MA: Blackwell Publishers, 1997
E. Kittay *Metaphor—It’s Cognitive Force and Linguistic Structure*, Oxford, England: Clarendon Press, 1987. E. R. MacCormac: *A Cognitive Theory of Metaphor* Cambridge, MA: The MIT Press, 1985
- 注 23 この図は、山梨正明『*比喩と理解*』1998年 東京大学出版会 によるフォーマットに基づいて筆者が作成したものである。
- 注 24 杉山洋介「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」*認知言語学フォーラム用のハンドアウト資料* 1998年、東京大学、p. 4。
- 注 25 山梨正明『*比喩と理解*』1998年 東京大学出版会 p. 22
- 注 26 Williams, Joseph M. “Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change,” *LANGUAGE: 52:2*, 1976, p. 461—p. 477.
- 注 27 山梨正明『*比喩と理解*』（*認知科学選書* 17）、東京大学出版会、1988。
山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『*HYPERION*』40、徳島大学英語英文学会、1993。
小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『*大阪樟蔭女子大学英米文学会誌*』29—3。
国廣哲彌「五感を表す語彙—共感覚的比喩体系」『*月間言語*』18—11、大修館書店、1995。
森貞「共感覚的比喩に関する一考察」『*福井工業専門学校紀要・自然科学工学*』29、福井工業専門学校、1995。楠見孝『*比喩の処理過程と意味構造*』、風間書房、1995、など。
- 注 28 亀井孝他『*言語学大辞典*』、三省堂、1996、p. 286。
- 注 29 池上嘉彦『*英語学コース第4巻 意味論・文体論*』、大修館書店、1985、p. 99。
- 注 30 芋阪良二編『*感覚*』（*講座心理学* 第3巻）、東京大学出版会 1969、p. 275。
- 注 31 ウルマン、(Ullmann, S.) 山口秀夫訳『*意味論*』、紀伊国屋書店、1964、p. 287、及び安井 稔『*言外の意味*』大修館書店、1978、p. 130—p. 131（ウルマンによる上昇移行説を引用）。
- 注 32 Williams, Joseph M. “Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change,” *LANGUAGE*, 52:2, 1976, p. 461 —p. 477.
- 注 33 山梨正明『*比喩と理解*』（*認知科学選書* 17）、東京大学出版会、1988、p. 58。
- 注 34 山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『*HYPERION*』40、

- 徳島大学英語英文学会、1993、p. 29—p. 40。9 森 貞「共感覚的比喩に関する一考察」
『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、福井工業専門学校、1995、p. 251—p. 267。
- 注 35 森 貞「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、福井
工業専門学校、1995、p. 251—p. 267。
- 注 36 山梨正明『比喩と理解』（認知科学選書 17）、東京大学出版会、1988、p. 60。
- 注 37 楠見 孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、1995。
国廣哲彌「五感を表す語彙—共感覚的比喩体系」『月間言語』18—11、大修館書店、1995、
p. p. 29—31。
山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』40、
徳島大学英語英文学会、1993。
森 貞「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、福井
工業専門学校、1995、p. 251。
- 注 38 小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29—3、大阪樟蔭
女子大学、1993、p. 64。
村田忠男「＜触覚＞さわることば—ウルマンのデータを中心に」『月間言語』18—11、大修館
書店、1989、p. 62—p. 67。
- 注 39 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、1995、p. 19。
- 注40 小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29—3。及び、
山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』40、徳島
大学英語英文学会、1993。
- 注 41 国廣哲彌『意味論の方法』、大修館書店、1982、p. 150。
注 42 小森道彦「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29—3、
p. 64、及び、山田仁子「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」
『HYPERION』40、徳島大学英語英文学会、1993、p. 40。
- 注 42 柴田 武『日本語はおもしろい』、岩波書店、1995、p. 89。
- 注 43 柴田 武『同上』、p. 89—p. 90。
- 注 44 柴田 武『同上』、p. 90—p. 91。
- 注 45 Backhouse, A. E. *The Lexical Field of aste: A Semantic Study of Japanese Taste Terms*.
Cambridge: Cambridge University Press, 1994, p. 155.
- 注 46 Jantima, Jantra. 「日本語形容詞『あまい』の意味拡張と広告における多義的使用の分析—
英語＜sweet＞及びタイ語＜waan＞と対照しながら—」『DYNAMIS』3、京都大学大学院

- 人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座、1999、p. 142—p. 193。
- 注 47 新村出編「広辞苑」、岩波書店、1990年、p. 464。
- 注 48 F ウングラー/H. J. シュミット『認知言語学入門』、池上嘉彦ら訳、1998年、大修館書店、
p. 33。
- 注 49 山梨正明『認知言語学原理』、2000年、くろしお出版、p. 196。
- 注 50 「万葉集」、十一巻、二七四二番の歌。
- 注 51 吉田兼好「徒然草」、六九段。
- 注 52 紀貫之「土佐日記」、『前掲書』。
- 注 53 紫式部「源氏物語—明石の巻」。
- 注 54 「万葉集」15巻。
- 注 55 紫式部「源氏物語—常夏の巻」。
- 注 56 作者不詳「堤中納言物語」虫めづる姫君の巻。
- 注 57 紀貫之「土佐日記」。
- 注 58 吉田兼好「徒然草」—五三段。
- 注 59 Lynne Cameron/ Graham Low “Metaphor” *Language Teaching*, Cambridge, U.K.:
Cambridge University Press, 1999, p.77 – p.96.
- 注 60 Jerrold M. Sadock “Figurative Speech and Linguistics (修辭的表現と言語学)” in
Andrew Ortony eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge, U.K.:University of Cambridge
Press, 1990, p.46 – p.63.
- 注 61 Donald Davidson “What Metaphors Mean,” in M. Johnson ed., *Philosophical Perspectives
on Metaphor*, Minneapolis: Minnesota University Press, p. 220-227.
- 注 62 Paul Grice “Logic and Conversation (論理と会話)” in Peter Cole and Jerry L. Morgan
ed. *Speech Acts, Syntax and Semantics Series Vol. 3*, New York: Academic Press, 1975.
- 注 63 John R. Searle “Metaphor” in Andrew Ortony eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge,
U.K.: Cambridge University Press, 1990, p. 92—p. 123.
- 注 64 Donald Davidson “On the Very Idea of a Conceptual Scheme (概念的図式の本質)”,
Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association
67, 1973 –1974, p. 5 –p. 20.
- 注 65 P. E. Wheelwright, *Metaphor and Reality*, Bloomington, U. of Indiana Press, 1962.
- 注 66 I. A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric*, London, Oxford University Press, 『新修辞
学理論』石橋幸太郎訳、南雲堂、1961年。

- 注 67 Max Black “Metaphor” *Proceedings of the Aristotelian Society n.s.55*, London: King’s College Press, 1954 –1955, p. 273 –p.294.
- 注 68 George Lakoff and Mark Turner *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago: University of Chicago Press, 1989, p. 233.
- 注 69 G. レイコフ・M. ジョンソン『レトリックと人生 (*Rhetoric We Live By*)』、渡辺昇一ら訳、大修館書店、1999 年、増補版、p. 88-p. 225.
- 注 70 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 3-p. 7.
- 注 71 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』、風間書房、2000 年、増補版、p. 10
- 注 72 Michael Reddy, “Conduit Metaphor” in N. Warren, ed., *Metaphor and Thought*. Cambridge, England: Cambridge University Press, 1979.
- 注 73 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 13-p. 15.
- 注 74 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 9.
- 注 75 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 4.
- 注 76 谷口一美『認知意味論の新展開』研究社、2003 年、p. 19.
- 注 77 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 18-p. 26.
- 注 78 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 37-p. 49 を参考。
- 注 79 G. レイコフ・M. ジョンソン『前掲書』、p. 46-p. 50.
- 注 80 Joe Grady *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*, Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, 1997.
- 注 81 J. Grady, S. Taub, P. Morgan “Primitive and Compound Metaphors” *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. By A. E. Goldberg, Stanford, 1996, p. 182.
- 注 82 Philip Wheelwright, *Metaphor and Reality*, Indiana University Press, 1962.
A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, Cambridge University Press, 1979.
- 注 83 新村出『広辞苑』岩波書店、1996 年、増補版、p. 170、p. 1461。
- 注 84 陳伯陶『日本語と修辞』台北・大新書局、1999 年、p. 155.
- 注 85 G. レイコフ・M. ターナー *More Than Cool Reason*, 大堀俊夫訳、『詩と認知』紀伊国屋書店、1989、p. 67. E. F. Kittay *Metaphor*, Oxford: Clarendon Press, U. K. 1987, p. 18. 原文は、
【When the evening is spread out against the sky, Like a patient etherized upon a table;】
出典は ‘The Love Song of J. Alfred Prufrock (ジェイ・アルフレッド・プルフロックの愛の賛歌)’ の詩の冒頭文。日本語訳は筆者による。

- 注 86 土田知則「直喩はどこに消えたのか」『人文研究—第 26』千葉大学、1998 年、p. 150。
- 注 87 利沢行夫『戦略としての隠喩——日常言語・小説にみる「ことば」のしくみ——』中教出版
1985 年、p. 217。
- 注 88 R. ヤコーブソン (R. Jakobson) 『一般言語学』みすず書房、1973 年、川本茂雄ら訳、
p. 210—p. 222。
- 注 89 山梨正明『比喩と理解 [認知科学選書 17]』東京大学出版会、1988 年、p. 93。
- 注 90 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1978 年。
- 注 91 J. Taylor *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford:
Clarendon Press, p. 123—p. 124。
- 注 92 山梨正明『前掲書』、p. 93。
- 注 93 田中茂範「認知意味論的探求 (3) 意味空間における焦点化としての換喩」『慶應義塾大学
言語文化研究所紀要—第 26 号』、1994 年、p. 183—p. 209。
- 注 94 グループ II 『一般修辞学』大修館書店、1996 年、増補版、p. 199—p. 207。
- 注 95 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1978 年、p. 150—p. 152。
- 注 96 A. Taversky 'Features of Similarity,' *Psychological Review* 84, 1977, p. 327—p. 352.
- 注 97 A. Ortony 'Beyond Literal Similarity,' *Psychological Review* 86, 1979, p. 161—p. 280.
- 注 98 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』風間書房、1996 年、p. 31。
- 注 99 楠見孝『前掲書』、p. 32。¹ 楠見孝『前掲書』、p. 32。
- 注 100 R. Tourangeau and R. Sternberg "Understanding and appreciating metaphors" *Cognition*
II, 1982, p. 203—p. 244.
- 注 101 楠見孝『前掲書』、p. 44—45。
- 注 102 楠見孝『前掲書』、p. 53—56。

参考資料

参考文献

- 池上嘉彦 (1985)『英語学コース第4巻 意味論・文体論』、大修館書店。
- _____ (1993)『意味論』大修館書店。
- 芋阪良二編 (1969)『感覚』(講座心理学 第3巻)、東京大学出版会。
- 大掘寿夫 (2002)『認知言語学』、東京大学出版会。
- _____ (2002)『認知言語学 II: カテゴリー化』、東京大学出版会。
- 河上誓作 (1996)『認知言語学の基礎』研究社。
- 楠見 孝 (1996)『比喩の処理過程と意味構造』風間書房、p. 31。
- 国廣哲彌 (1967)『構造的意味論』(ELEC 言語叢書)、三省堂。
- _____ (1970)『意味の諸相』、三省堂。
- _____ (1982)『意味論の方法』、大修館書店。
- _____ (1986)「語義研究の問題点——多義語を中心として——」『日本語学』5-9、明治書院。
- _____ (1989)「五感を表す語彙—共感覚的比喩体系」『月間言語』18-11 大修館書店。
- 久米 博 (1992)『隠喩論』思潮社。
- 国立国語研究所 (1977)『比喩の表現・用法の研究』秀栄社。
- 小森道彦 (1993)「共感覚表現のなかの喚喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌』29-3、大阪樟蔭女子大学。
- 坂本 茂 (2003)『認知言語学の発展』、ひつじ書房。
- 佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚』講談社、p. 150—p. 152。
- _____ (1981)『レトリック認識』、講談社学術文庫。
- _____ (1992)『レトリック感覚』、講談社学術文庫。
- _____ (1996)『レトリックの意味論』、講談社学術文庫。
- _____ (1981)『レトリック認識』講談社。
- 芝原宏治 (1995)『錯誤の意味論』海鳴社。
- 杉本孝司 (1998)『意味論 1——形式意味論』くろしお出版。
- _____ (1998)『意味論 2——認知意味論』くろしお出版。

- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』海鳴社。
 _____ (1995) 『メタファー思考』講談社。
- 柴田 武 (1995) 『日本語はおもしろい』、岩波書店。
- 田中茂範 (1994) 「認知意味論的探求 (3) 意味空間における焦点化としての換喩」『慶應義塾
 大学言語文化研究所紀要—第 26 号』、p. 183—p. 209.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』研究社、p. 19。
- 利沢行夫 (1985) 『戦略としての隠喩—日常言語・小説にみる「ことば」のしくみ—』中教
 出版、p. 217。
- 豊地正枝 (2004) 『XはYが+述語形容詞』構文の認知論的分析——「花は桜がいい」構文の
 意味分析を中心に——』慧文社。
- 丹保健一 (1990) 「五感語彙の多義性について——多義の意味的広がりをめぐる——」『金沢大
 学語学・文学研究』19、金沢大学教育学部国語・国文学会。
- 中村 明 (1952) 『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所。
 _____ (1991) 『日本語のレトリックの体系』岩波書店。
- 中右 実・瀬戸・巻下 (1997) 『文化と発想とレトリック』研究社。
- 野本和幸 (1999) 『意味と世界—言語哲学論考』法政大学出版局。
- 箱田祐二 (編) (1996) 『認知科学のフロンティア II』サイエンス社。
- 服部四郎 (1979) 「意味の理論」国広哲弥ら編『日本の言語学 第五巻 意味・語彙』大修館書
 店。
- 本多 啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』、東京大学出
 版社。
- 村田忠男 (1989) 「<触覚>さわることば—ウルマンのデータを中心に」『月間言語』18—11、
 大修館書店。pp62—67
- 羽山洋介 (1993) 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる——」『名古屋大学日本語
 ・日本文化論集』1、名古屋大学留学生センター。
 _____ (1985) 『英語学コース第4巻 意味論・文体論』、大修館書店。
 _____ (1998) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩 (メタファー・シネクドキ
 ・メトニミー)」認知言語学フォーラム (多義語の分析を巡るワークショ
 ップ) 資料。
 _____ (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社。

- 森 貞 (1995) 「共感覚的比喩に関する一考察」『福井工業専門学校紀要・自然科学工学』29、
福井工業専門学校。
- 森田良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践』 ひつじ研究叢書、(言語編) ひつじ書房。
- 山田仁子 (1993) 「一言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」『HYPERION』 40、
徳島大学英語英文学会。
- 山梨正明 (1983) 『推論と照応』 くろしお出版。
(1992) 『意味論』 大修館書店。
(1995) 『認知文法論』 ひつじ書房。
(1988) 『比喩と理解』 (認知科学選書 17)、東京大学出版会。
(1999) 「外界認知と言葉の世界——空間認知と身体性の問題を中心に——」『日本語学』 18-8、明治書院。
(2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版。
(2001) 『認知言語学論考』 No.1、ひつじ書房。
(2002) 『認知言語学論考』 No. 2 ひつじ書房。
(2003) 『認知言語学論考』 No. 3 ひつじ書房。

論文集・講座・紀要・雑誌

- 楠見 孝 (1985) 「比喩文における語句間の類似性」『心理学研究 56、サイエンス社。
- 佐藤信夫 (1982) 「転義あるいは比喩のかたち—または逆比喩について」『理想』 第 595 号。
- 鈴木敏昭 (1997) 「多義語におけるメタファーの働きについて」『富山大学人文学部紀要』 27。
- 田中茂範 (1994) 「認知意味論的探求 (3) 意味空間における焦点化としての換喩」『慶應義塾
大学言語文化研究所紀要-第 26 号』、p. 183—p. 209。
- 土田友則 (1998) 「直喩はどこに消えたのか」『人文研究 第 26 号』 千葉大学紀要、 p. 131—
p. 154。
- 豊地正枝 (2002) 「共感覚比喩表現に対する考察」『2002 年日本研究国際会議論文集』 台湾大
学・台湾日本語教育学会。
(2003) 「シネクドキに対する認知意味論的考察」『台大日本語文—5』
- 初山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類——隱喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中
心に—」『名古屋大学国語国文学』 80、名古屋大学国語国文学会。

古典文学全集

紀貫之「土佐日記」

「万葉集」、十一巻、二七四二番の歌、十五巻。

紫式部「源氏物語—常夏の巻、—明石の巻」。

作者不詳「堤中納言物語」虫めづる姫君の巻。

吉田兼好「徒然草」六九段、—五三段。

辞書

新村 出 (1996) 『広辞苑』岩波書店、増補版、p. 170、p. 1461。

翻訳書

グループU (1996) 『一般修辞学』佐々木健一ら訳、大修館書店、p. 199—p. 207.

I. A. リチャーズ(1936) 『新修辞学理論』石橋幸太郎訳、南雲堂、1961。

A. J. グレマス (1986) 『構造意味論』田島弘ら訳、紀伊国屋書店。

W. L. チェイフ (1974) 『意味と意味構造』青木晴夫訳、大修館書店。

E. A. ニイダ (1977) 『意味の構造：成分分析』安藤貞雄訳、研究社。

R. ヤーコブソン (1998) 『一般言語学』川本茂雄監修、田村ら訳、みすず書房。

R. ラネカー (1970) 『言語と構造』牧野成一訳、大修館書店。

G. N. リーチ (1977) 『現代意味論』安藤監訳、研究社。

G. レイコフ・M. ターナー (1989年) 『詩と認知』大堀俊夫訳、紀伊国屋書店、p. 67.

G. レイコフ (1999年・増補版) 『レトリックと人生』渡辺昇一ら訳、大修館書店、p. 3—p. 7、
p. 46—p. 50、p. 88—p. 225。

G. レイコフ (1993・増補版) 『認知意味論』池上嘉彦訳、紀伊国屋書店。

英文書・外国文献

陳 伯陶 (1999) 『日本語と修辞』台北・大新書局、増補版、p. 155.

Black, Max. (1954—1955) “Metaphor *Proceedings of the Aristotelian Society* n. s. 55,

- London: King' s College Press, p. 273 —p. 294.
- Backhouse, A. E. (1994) *The Lexical Field of taste: A Semantic Study of Japanese Taste Terms*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, L. /Low, G (1999) “Metaphor” *Language Teaching*, Cambridge, U.K. : Cambridge
University Press.
- Cooper, David (1986) *Metaphor: Aristotelian Society Vol. 5*. Oxford, England:
Basil Blackwell, p. 118–p. 127.
- Cook, Haruko (1993) “Schematic Values of the Japanese Nominal Particles WA and
GA” in R. A. Geiger & B. Rudka—Ostyn eds., *Topics in
Cognitive Linguistics*, p. 371–p. 397.
- Davidson, Donald (1973—1974) “On the Very Idea of a Conceptual Scheme”
*Proceedings and Addresses of the American Philosophical
Association 67*, p. 5 —p. 20.
- Grady, Joe. (1997) *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*,
Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Grady, Joe & Taub, S. Morgan, P. (1996) “Primitive and Compound Metaphors”
Conceptual Structure, Discourse and Language, ed. By A. E. Goldberg,
Stanford, p. 182
- Grice, Paul (1978) “Logic and Metaphor ” in Peter Cole and Jerry L. Morgan
ed. *Speech Acts, Syntax and Semantics Series Vol. 3*, New York: Academic
Press, 1975.
- Jantima , Jantra. (1999) 「日本語形容詞『あまい』の意味拡張と広告における多義的使用の
分析—英語<sweet>及びタイ語<waan>と対照しながら—」『DYNAMIS』3、
京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座。
- Jerry L. Morgan eds. *Speech Acts, Syntax and Semantics Series Vol. 3*, New York:
Academic Press.
- Jerrold, Sad. M. (1990) “Figurative Speech and Linguistics” in Andrew Ortony
eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge, U. K. : University of Cambridge
Press, p. 46 – p. 63.
- Johnson, Mark (1987) *The Body and Mind—The bodily basis of Meaning*

- Imagination, and Reason*, Chicago: Chicago University Press.
- Kittay, E. (1987) *Metaphor—Its Cognitive Force and Linguistic Structure*, Oxford, England: Clarendon Press.
- Ortony, A. (1979) “Beyond Literal Similarity,” *Psychological Review* 86, p. 161 —p. 280.
- Reddy, Michael (1979) “Conduit Metaphor” in N. Warren, ed., *Metaphor and Thought*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Rumelhardt, D. (1989) “Notes on a Schema for Stories” A. M. Collins, eds. *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*, New York: New York Academic Press, p. 211–p. 236.
- MacCormac, Earl R. (1985) *A Cognitive Theory of Metaphor*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Searle, John R. (1990) “Metaphor” in Andrew Ortony eds. *Metaphor and Thought*, Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press, p. 92 —p. 123.
- Saeed, John I. (1997) *Semantics*, Cambridge, MA: Blackwell Publishers.
- Taylor, J. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford: Clarendon Press, p. 123–p. 124.
- Taversky, A. (1977) “Features of Similarity” *Psychological Review* 84, p. 327 —p. 352.
- Tourangeau, R. and Sternberg, R. (1982) “Understanding and Appreciating Metaphors” *Cognition II*, p. 203–p. 244.
- Wheelwright, P. E. (1962) *Metaphor and Reality*, , Bloomington, U. of Indiana Press.